

ダンジョンに番長が  
いるのは間違っている  
のか？

ジャッキー007

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

男の中の男

誰もが一度は憧れた大きな背中

一人の青年は、その背中に憧れ己を磨き続ける

たとえそれが、自身の知らない世界でも

# 目次

ダンジョンに番長がいるのは間違っているのか？	1
漠の宿題	9
番長、異世界に立つ！	18
番長、悩む	24
番長、語る	31
漠の決意	45
特訓開始！	55
入団試験	69
ステイタス	86
地下迷宮	98
猛者	112

神会  
死闘  
休日

167 138 128



ダンジョンに番長がいるのは間違っているのか？

今より昔、天上での生活に退屈していた神々は、娯楽を求め地上へと降り立った。

神は人とともに暮らし、彼らに様々な恩恵を与えてきた。

そんな神と人が、特に多く集まっている一つの街がある。

迷宮都市『オラリオ』。

世界でも唯一、ダンジョンと通称される地下迷宮の上に造られたこの街には、様々な神と人がともに暮らしている。

神々は人と家族ファミリアとなり、恩恵を与えられた人は『冒険者』となつてダンジョンへと潜る。

下へ下へと降りていくにつれ強力なモンスターが現れるダンジョンの49階層。

其処では、様々な人種がその手に武器を取り、襲い来るモンスターに抗っていた。

杖を持つ翠髪の美女が。

斧を持つ屈強な体つきをしたドワーフが。

銀色の髪と、同色の体毛をもつ耳と尻尾を生やした男が。

褐色の肌を持つ二人の女戦士が。

それぞれの武器を手に、己が得意とする戦いを行なっている。

彼らを指揮するのは、道化師の描かれた旗を持つ少年…否、少年と見間違える外見をした男。

フィン・ディムナ…勇者の二つ名を持つ冒険者で、モンスターと戦っている彼ら『口

キ・ファミリア』を纏め上げる団長だ。

そして…フィンの隣に、彼は居た。

黒く裾の長い上着で、其処には鎧と見紛うばかりに鍛え上げられた肉体を隠し。

足には二枚の歯が特徴的な木製の履物…東洋で「下駄」と呼ばれるものを履いている。

頭部には着ている服と同じ黒い帽子を被っているのだが…それによって多少軽減されてなお、鋭い眼光は目の前で練り広げられる戦いを見据えている。

「左翼の防衛が弱まつてる……このままじゃマズいかな」

視野を広げ数十人単位で人とモンスタ―が入り乱れた戦場を見つめ、フィンが小さく呟く。

如何に陣形が、布陣が完璧であつても其処に居るのは人だ。

度重なる攻撃の波に疲弊し、呑まれる事もあり……それによつて、命を落とす事もあり得る。

前線でモンスタ―を蹴散らす、ファミリアでも上位の冒険者に左翼の支援を支持しようとしてフィンは口を開いた。

だが。

「っ！」

その前を、黒い塊が横切つた。

隣に目をやれば、先程まで居た「彼」の姿が何処にも見当たらない。

視界の端には、途轍もない速さで遠ざかつていく黒い背中が見える。

「まったく……あの坊主はまた持ち場を離れおつて」

「あはは……でも、それが彼じゃないか」

自身の側に控え、背後で呪文を紡ぐエルフ：リヴェリア・リヨス・アールヴの護衛を行なっているドワーフ、ガレス・ランドロツクがぼやくのを聞きながらもフィンは小さく、清々しそうに笑みを浮かべ男が走って行った方を見つめた。

モンスターの攻撃により、ついに崩れた左翼の防衛線。

必死に陣形を立て直そうと冒険者達は盾を構え、モンスターを食い止めるが、留まる事のない波が一体、また一体とモンスターを防衛線の中へと浸入させる。

「レフイーヤ！」

モンスターが振るった棍棒により体勢を崩された冒険者たちの中に、一人の少女が居た。

薄桃色を基調とした衣服を纏い、絹糸の様な金髪を一つに結わえた彼女の名は、レフイーヤ・ウイリデイス。

ロキ・ファミアに所属する第二級冒険者の一人で、魔法による攻撃を得意とするエルフの少女だ。

モンスターの攻撃による余波で転倒したレフイーヤは、体を起こし体勢を立て直そうとするが、彼女の視界に自身に向けて棍棒を振り上げるモンスターの姿が映った。

周りの音が消え、時間がゆっくりと流れるような錯覚のなか、モンスター…フオモールが振り下ろした棍棒が自身に近づいてくる。

しかし、それは自身に触れる事は無く。

次の瞬間、レフイーヤの視界に映ったのは

黒い塊に吹き飛ばされるフオモールの姿だった。

フオモールを吹き飛ばしたものの…それは、フィンのもとを飛び出して行った男が放った拳だった。

「あ…」

その眩きは、誰が発したものか解らない。

だが、その場に居た全員が、男の背中に見惚れていた。

「…無事か」

小さくも太く、存在感のある声が男の口から洩れる。

その言葉は、簡素で無愛想ながらも聞いたものに安心感を与える声音で

「あ…」

レフイーヤを含むその場に居た全員が、表情を変えた。

ロキ・ファミリアには一人の男が居る。

男は、ファミリアに入って僅か1年で第一級冒険者に上り詰めた。

男は、武器を持たず、己の拳で並み居る強敵に立ち向かい、勝利を掴んだ。

それでもなお、男は己を痛めつけ、前へと進み続ける。

全ては、己の目指す高み…漢の頂に至る為に。

そんな男に神々から授けられたのは

男が居た世界で、男の中の男に与えられ、名乗ることを許された称号

「番長さんっ！」

『番長』：そう呼ばれる男の名は。

轟とどろき剛士たけし……迷宮都市オラリオで唯一の異邦人だった。

## 漢の宿題

太陽が西に傾き、人の通りも疎らとなった河川敷

ビルの谷間へと沈みゆく夕陽に照らされていること其処に、二人の男が居た。

鍛え上げられた、分厚い筋肉質な身体つきという一見同一人物にも見える二人を唯一  
区別できる要素と言えば、彼らの着ている服がそれぞれ学生服とスーツという違いくら  
いか。

川の流れと風が揺らす草の音以外、静寂に包まれるなか、男たちは互いに向かい合い、  
その眼を見据えている。

逸らしたら負け……今この時も勝負だと言わんばかりの鋭い眼光だ。

二人が向かい合い、既に10分が経とうとした頃か。

彼等の立つ位置から10m程離れた場所に生えた木から、一羽の鴉が飛び立った瞬

間。

男たちは、どちらとも無く駆け出した。

『つオオオオオリヤアアアアッ!』

互いに手を伸ばせば顔に触れられる距離へと近づくや、両者は気迫と共に拳を叩き込む。

同時に放たれた拳は互いの顔面に突き刺さる事なく、互いの間でぶつかり合い

一拍の静寂に包まれた：その瞬間。

轟っ!

つと突風が吹いた。

其処からは、息も吐かせない程の応酬だった。

学生服を着た青年が石のように無骨な拳を放てば、スーツ姿の男がお返しとばかりに丸太のように太く鍛え上げた右脚の蹴りを放ち。

青年が男の蹴りを抱え込むように受け止め、大木を引き抜くように己の膂力を持って投げ飛ばせば、男はその体軀に見合わない軽やかさで受け身を取りながらも着地し、す

かさず拳を青年に叩き込む。

その鬪いは、泥臭く。

それでいて、見るものを惹きつける何かがあつた。

男達が互いの力をぶつけ合い、1時間が経つた。

その間、二人は休む事なく動き続け、互いの身体を痛めつけた。

男は、青年の全力を試すように。

青年は、男に答えるように。

その応酬は、男に青年が答える度に激しさを増していった。

だが、始まりがあれば終わりもあるのが世の常。

何発目かも解らない男の拳が顔面に叩き込まれた時、青年はついにその膝を地面に着けた。

「…子鹿みてえだった子供が、随分と成長したじゃあねえか」

傷だらけになりながらも、その瞳に未だ闘志を燃やし続ける青年を見据え、男が呟く。男の視界の先…地面に膝をつく青年の姿は、彼の目には、初めて出逢った頃のまだ幼く、線の細い少年が重なって見えていた。

「…俺は…虐められていたのを助けて貰ったあの日から、アンタに憧れて生きてきた」  
ゆつくりと、ふらつきながらも立ち上がった青年は、男を強く見据えたまま口を開く。  
「身体の弱さも、周りからの侮蔑も…乗り越えてきた…全ては、憧れたアンタの背中に追いつくために」

「ああ。其れが決して楽じゃねえ道のりだったのは、よく解る…だがなあ」

青年の吐露に、男は感慨深そうに深く頷く。

まだ幼く、小さかった身体が大きく、逞しく成長するのはとても困難な道のりだったはずだ。

だからこそ、男は問いたかった。

「俺に追いついたとして…それから、お前さんはどうするんだ？」

青年のその先を。

男の問いかけに、青年は目を見開いた。

憧れの背中に追いついた先……そんなもの、青年の頭の中には欠片も考えていなかった。

青年にとって、これまでの人生は男の背中に追いつく……その為だけに全てを注いできたからだ。

「お前さんはたしかに強くなった……だが、俺に追いつく事を考えてばかりじゃ、まだまだだ」

男は、諭すように青年へと語りかけながらも弓を引き絞るように拳を構える。

その周囲の空気が歪み、揺らいで見えるのは、それだけ男が込めた闘志が高まっている証拠なのだろう。

「コイツは俺からの宿題だ……！」

そう言つて、男は青年の胸板へと拳を叩き込んだ。

「ぐう…っ?!」

鋭い衝撃が青年の身体を襲う。

男が最後に放つた一発は、今迄受けてきたどんな攻撃よりも重く、鋭かった。どれだけ己を鍛えれば。

どれだけの思いを乗せれば、此れだけの一撃になるのだろうか。僅かな浮遊感と、直後の冷たい感覚に包まれながら男は意識を手放した。

だが、意識を失う瞬間たしかに聞こえた。

「お前さんも男なら…俺を超えてみせろ」

自分に背中を向ける男の声が。

場所は変わり、迷宮都市オラリオ。

天高く聳える塔……バベルの下に広大な地下迷宮を持つこの街を、四人の少女が歩いていた。

「ん〜っ……今日の冒険者依頼も疲れたあ！」

「早くシャワーを浴びたいわね」

疲労の溜まった身体を伸ばし、今後のことを話すのは、褐色の肌を持つ二人の少女。

テイオナ・ヒリユテとその双子の姉ねテイオネ……女性で構成された武闘派部族、アマゾネス出身の姉妹だ。

その隣を歩くのは白を基調とした服の少女と、杖を携えた少女。

アイズ・ヴァレンタインとレフィーヤ・ウイリデイス：その二人を含めた四人は、自分達の所属するロキ・ファミリアの拠点『黄昏の館』に向けて足を進める。

「…？」

あと少しで拠点へと到着する距離まで接近したときだ。

不意に、道沿いに建ち並ぶ開店前の二つの店：その間にある細い路地へと視線を移したアイズは、あるものを視界に捉えた。

「アイズさん、どうかしましたか？」

「あれ…」

思わず立ち止まったアイズを見て、隣に控えるように歩いていたレフィーヤも立ち止まり小さく首を傾げる。

小さく呟きながら、アイズが指差す方へとレフイーヤは視線を移す。

それにつられてか、先を歩いていたテイオネ、テイオナの姉妹も二人の元へと駆け寄り、アイズが指差すものを見た。

アイズ・ヴァレンタインが指差す細い路地。

そこには、濡れた衣服をまとう傷だらけの男が倒れていた。

## 番長、異世界に立つ!

今でも尚、忘れることのない記憶。

夕陽に照らされた公園：その中央で、数人の少年たちが固まって、ひとりの少年を囲んでいた。

その中でも、一際体格の大きい少年が、囲んでいた細い少年を蹴り飛ばす。

さらに、それに続いて他の少年たちが、倒れていた少年へと手を挙げた。

腹を、背中を、庇う腕の上から顔を蹴り続ける。

口の中が切れ、鉄臭い血の味が広がる。

蹴られるたびに痛みが襲うが、少年は其れに耐え続ける。

少年たちが居る公園は、人通りの少ない町外れにある。

更に、夕方と言うこともあり人の気配は感じられない。

一人の少年を虐め、痛めつけるには格好の場所だった。

少年が痛みに耐えるのは、誰かの助けを待ったためではない。

自分を蹴り続ける少年たちが飽きるのを待ったためだ。

其れが、一時凌ぎでしかない事は理解している。

泣きもせず、ただ痛みに耐える少年に苛立ちが募ったのだろう。

リーダー格の少年が髪を掴み、拳を振り上げた時だった。

「男が寄ってたかってみっともねえ真似してんじゃねえよ」

低く、鋭い男の声が響く。

その日を、少年は忘れない。

学生服に隠された、鍛えられ引き締まった大きな背中を。

鋭く、獐猛な獣を彷彿とさせながらも、一切の澁みのない真っ直ぐな瞳を。

そして：男の姿を見た時、胸に湧き上がり、この身を燃やし尽くすような熱い感情。

男に対する、憧れを。

「む……っ……」

　　瞼の上から刺激を与えてくる朝の日差しで、青年はその目を開ける  
　　ぼーっとする頭で辺りを見回し……次第に、此れでの事を思い出した。  
　　自身が憧れた背中へ挑み、そして、敗北した事を。

「負けたのか……」

　　ぼつり、と青年の口から言葉が洩れる。

　　何度も心が折れそうになり、血反吐を吐いても、そこから立ち上がり這い上がってきた。  
　　た。

　　其れでも尚、男の立つ場所には至らなかつたのだ。

「……遠いな」

悔しさの混じった声を洩らす、その瞳は悲観に染まっていない。

新しい目標…男が課した宿題が、再び青年の胸に闘志を燃え上がらせたからだ。

だが…漸く意識がハッキリとしたのか、辺りを見回しはて、と青年は首を傾げる。

それもその筈。

青年が起きた場所は、自身が住んでいる場所とまるで違うのだから。

青年が住んでいるのは、六畳一間、風呂トイレが一緒のユニットバスが特徴的なアパートだ。

だが、今青年の眼前に広がるのは、木造の、洋風な部屋だった。

それどころか

「なんだ…あれ」

青年は、己の視界に映るものを目を見開いた。

そこに見えたのは、一つの塔。

天高く聳えるその塔は、鉄製の電波塔とは違う。

石造りの塔だった。

これまで、青年が生きてきた人生で見た石造りの塔なんてものは、異国の風景を収めた写真でしかない。

だが、それでも。

その写真で見たものよりも、彼の目に映る塔は高かった。

見た事もない塔、知らない部屋

青年の思考は、整理をしようにも更に混乱していくばかりだ。

だが、そんな中でもたった一つ。

今いる場所は、青年…轟 剛土が住んでいた日本ではない。  
それだけは、漠然と理解する事が出来た。

## 番長、悩む

剛士は困惑していた。

彼の目の前に居るのは、褐色の肌をした1人の少女。

少女は、向日葵が咲いたような眩しい笑顔を浮かべ、剛士に話しかけている。  
だが…。

「????????」  
「ぬう」

少女が話している言葉が、全くもって理解出来なかった。

時間を遡ること、数分前。

呆然と窓から見える景色を見ていた剛士の耳が、扉が開く音を捉えた。

振り返った先に居たのは、1人の少女だった。

髪を短く切り、民族衣装のようなものを身に纏うその少女は、剛士の姿を見るとパ  
アツと笑顔を浮かべる。

やがて、その少女……テイオナ・ヒリユテは剛士のもとへと駆け寄って

『気分はどう?』

小さく首を傾げた。

テイオナの口から出たのは、発見してから3日間目を覚まさなかつた剛士を氣遣う言  
葉。

だが、此処……オラリオのある世界は、剛士が暮らしていた世界とは全く違う異世界だ。  
故に

「????????」

剛士には、何を言っているかが理解出来ていない。

『男たるもの学び、挑む事を怠るな』をモットーに憧れた背中へと追いつく為、剛士は体を鍛えるだけではなく勉強にも励んだ。

元々真面目な性格もあり、外見に似合わず剛士は英国を始めとした4ヶ国語を理解出来る。

だが、それでも少女の言葉は理解出来なかつたのだ。

自分の知り得る記憶を片っ端から漁り、剛士はテイオナが話す言葉が何処の言語かと考えるが、彼の記憶に存在する言語に該当するものは見当たらなかつた。

(見覚えのない風景から、日本ではないと思っていたが…)

まさか、言葉そのものが違うとは。

????????????????  
????????????????  
????????????????

眉間に深く皺を刻み、思考を巡らせていた剛士の視界いつぱいに、テイオナの顔が映る。

「っ?!」

なんて事ない。

眉間に皺を刻み難しい表情を見せる剛士の姿を心配したティオナが、剛士に近づいて顔を覗き込んだだけだ。

だが、これまでそう言った経験のない剛士にとってティオナの行動は予想以上の出来事だった。

「なんでもない…だから、もう少し離れてくれ」

ティオナから視線を逸らし、無意識に声をかけるが…とうのティオナ本人は、剛士の言葉が理解出来ていないのだろう。

「?」

小さく首を傾げていた。

「…はあ」

通じないだろうが、仕方ない。

「…俺の言葉が、分かるか?」

「??」

ティオナへと再び視線を移し、剛士は改めて口を開いた。

対して、ティオナは小さく首を傾げたまま。

つまりは、そういう事なのだが、剛士は自身が覚えた他国の言葉を用いて同様の質問を繰り返してみた。

だが、テイオナの反応が変わることはなかった。

目の前で耳に指を入れる姿を見たのには驚いたが、言葉通り耳をかつぽじって剛士の言葉を一語一句聞き漏らさんとする意志が感じ取れる。

だが、それでも。

剛士の言葉がテイオナに通じることは無かった。

『……』

二人同時に腕を組み、首を捻る。

互いに何を言っているか解らない……それが解決しない事には、意志疎通など夢のまた夢なのだから。

「あ、おい！」

不意に、何かを思いついたような表情を浮かべたテイオナは、剛士に声をかけると部

屋を飛び出す。

その時に見せた両手のひらを此方へと向ける仕草……それが、恐らく待つてくれという事だけは剛士には理解出来た。

????????

それから数分が経ち。

再びやってきたティオナ……いや、その後ろを見て剛士は微かに口角をひくつかせた。

??????  
 彼女の後ろに居るのは、尖った耳が特徴の翠髪の女性と髭を蓄え、鍛えられた恰幅の  
 良い体つききの男。

そして……その二人に挟まれて居ながらも萎縮した様子を見せず、冷静な少年。

彼等の姿を見て、再び同じ試みを行うのか……剛士は、理解出来ない言葉を話す三人の姿に途方にくれた。

## 番長、語る

テイオナ・ヒリユテは困っていた。

彼女の目の前に居るのは遡ること3日前、同じファミリアのアイズ・ヴァレンシユタイン達と発見した1人の青年。

この青年：名前を『轟 剛士』と言うのだが、テイオナがまだ剛士の名を知らないため、此処では青年と呼称しよう。

濡れた衣服を纏い、気絶していた青年を担ぎ、自分たちの拠点である黄昏の館へと辿り着き、保護すると彼女達4人にある命令が下される。

「青年が目を覚ましたら、彼のことについて少しでも情報を聞き出すように」

そう言ったのは、ファミリアの団長である小柄な少年：否、少年のような見た目をした1人の男。

フィン・デムナ：小人族出身の冒険者で、オラリオでも数少ないレベル6。

彼から下された命令に、双子の姉であるテイオネは俄然やる気になっていたが、テイオナ自身も興味がないと言うわけではなかった。

それからと言うもの、青年を発見したアイズ、レフィーヤとティオナ、ティオネの姉妹は交代で青年の様子を確認して、まだ目が覚めていない事をフィンへと報告する日々が続いた。

それから3日後、ティオナが様子を確認する番になり青年が眠る部屋に向かった時：事態は進展する。

今迄ずっと、眠ったままだった青年が遂に、目を覚ましたのだ。

だが：ここで、一つの問題が発生した。

青年の言葉が、ティオナには理解出来なかったのだ。

話の内容に、ティオナがついていけなかった訳ではない：単純に、青年が何を話しているかが解らないのだ。

ティオナの頭が悪い訳ではない。

彼女の趣味は、こう見えても読書：中でも英雄譚を好んでいる。

そのために、テイオナは読み書きの他にも多少、共通語以外の言葉も理解出来るように学んだ事がある。

だが、件の青年の口から出た言葉は、自分が理解出来ないものだった。

その言葉がどのような発音され、どのような意味を持つのか

その一切が、解らなかつた。

これでは、青年が何者なのか解らないではないか。

純粹に、青年に対して好奇心を抱いていたからこそテイオナは悩んだ。

悩んだ末、テイオナはふと思いついた。

自分で解らないのなら、年の功：先達に知恵を借りよう、と。

「フィン！」

青年の居た部屋を飛び出し、とある一室へと走ったテイオナは、扉を開けるや中に居る人物へと声をかける。

テイオナが訪れた部屋の中、その正面にある机に座り、書類を眺めている一人の少年。

否…少年と見紛う容姿をした男こそが、このロキ・ファミリアの団長  
フィン・ディムナその人である。

「どうしたんだい？ そんなに血相を変えて」

息を切らしながら部屋へと入って来たティオナへと、書類から目を話したフィン  
は声をかける。

普段から明るく快活な性格をしたティオナの、普段とは違う何処か慌てている  
様子に疑問を感じてのことだ。

「それがね…」

フィンに尋ねられたティオナは、どのように切り出せば良いものか悩みつつ、  
頭の中でこれまでの事を思い出しながらこの部屋へ来るまでの顛末を話し出した。

「…それは、本当かい？」

テイオナから全ての話を聞き終えたフィンは、その瞳を鋭いものへと変えて思考する。

テイオナ曰く、自分達の言葉が通じない件の青年は、これまで眠っていた部屋にまだ居るようだ。

テイオナがこのような嘘を吐く娘ではない事は、フィンも理解している。

だが、彼女の口から語られた話は些か信じられるものではなかった。

フィンやテイオナが話す言葉は、彼らの住む世界で言う共通言語。

他国では違う言葉を話す者も居るといふ話は聞いた事があるが、共通語の教養くらいは受けている筈。

だが、その青年はまるで「共通語を理解出来ない」。

「……こればかりは、直接会わなきゃ解らないか」

本当に、テイオナの言うとおりに青年は共通語が理解出来ないのか。

それを確かめるべく、フィンは席から立ち上がった。

そして、僅かに時は流れ。

「彼が、テイオナが言っていた青年か」

「ふむ、俄かに信じられんのお」

青年が居る部屋には、フィンとテイオナの他に、エルフの女性とドワーフの男性が訪れていた。

リヴェリア・ヨルズ・アールヴとガレス・ランドロック。

フィンと同じ、ロキ・ファミリアに古くから所属するメンバーで、最も信頼出来る者たちだ。

彼らは、フィンから事のあらましを知り、自らの目で確かめるべく集まったのだが…。

「見事なまでに、我々の言葉が分かってない様子だな」

「そうみたいだね…」

フィン、リヴェリア、ガレスと其々が交代して青年にいくつかの質問をしてみたのだが、青年はその質問に対して答えてはくれなかった。

それ以前に、言葉を理解していないと言わんばかりに首を傾げるばかり。

「何かを言っておるのは分かるが、その意味が解らんと言った表情じゃな」

「それに、彼が話す言葉…それすら、我々には何を言っているのか解らないと来たか」

困惑の表情を浮かべながらも、口を開いてくれた青年の事を思い出してガレスは腕を組み、リヴェリアは顛顛に指を当てながら小さく溜息を溢す。

「ここまでか、と四人が半ば諦めかけていたその時だった。

「なんや、皆こんな所に居ったんか」

何処か軽い口調で一人の人物…否、神物が部屋の入り口から顔を覗かせた。

「あ、ロキ！」

テイオナが名前を呼ぶ彼女こそ、ロキ・ファミリアを興した主神。

北歐では姦計と知略の神として知られているロキ、その神だ。

「お、コイツか？アイズたん達が拾ってきたちゆう男は？」

フィン達に囲まれている青年に気づいたロキは、部屋の中へ入ってその姿を上から下へと見ていく。

その姿を見ていたフィンは、「もしかしたら……」と小さく呟くと意を決したように口を開いた。

「言葉が全く通じない？」

フィンから話を聞いたロキは、「んなアホな」と言いたげな表情で四人と青年を交互に見る。

「困った事に、僕たちじゃ彼が言っている言葉が解らなくてね……デウスデア超越存在であるロキなら、解るんじゃないかい？」

「そうは言ってもな……コイツが嘘ついとる可能性もあるやん？」

肩を竦めるフィンの言葉に、ロキは心底面倒そうな表情を浮かべ、改めて青年を見る。少なくとも、オラリオでは見た事のない衣服を纏った件の青年が他所の国から来た事は確かだろう。

「それを確かめるべく、ロキに頼んでいる」

「神の前では、儂等は嘘を吐けんからな」

フィンとの会話を聞いていたリヴェリアとガレスの言葉に、ロキは少し考える。彼らの言うとおり、超越存在である神に、子供である人は『嘘を吐くことが出来ない』。こよう言つた問題に関しては、この場ではロキ以外に解決出来る者は居ないのだ。

「…しゃあないか」

面倒そうな表情でボリボリと頭を掻きながらも、ロキは青年の前に立つ。

なんだかんだ言いつつも、子に頼まれたら応えてやりたいのが親なのだろう。

「なあ、アンタ」

目線を合わせるように顔を近づけ、ロキは青年へと声をかける。

「ウチの言葉が解るか？」

「……」

短い、たった一言の質問。

その問いに、青年は目を見開いた。

微かに緊迫した空気を醸し出す二人を、固唾を呑んで見守る四人。

たった数秒の沈黙すら、数時間に感じる程の何かが、其処にはあった。

「」

やがて、ゆっくりと青年の口が開かれる。

誰もが、次に発する言葉を聞き洩らすまいと耳を傾ける。

「……」  
青年の口から紡がれたのは、先程と同じ。

フィン達四人の頭を抱えさせた、未知の言語だった。

「……ロキでも同じかあ」

小さく、落胆したようにテイオナは溜息を吐いた。

ロキならばと期待があつた分、その気持ちが大きいのだろう。

だが、他の者達はそうでは無かつた。

「……ロキ?」

一番初めに気づいたのは、フィンだった。

ロキは、普段は薄く閉じている瞼を微かに開き、鋭い瞳で青年を見つめている。

「……」  
そして、幾度か声を出して何かを確認するとロキは青年に対して再び口を開き

「……」  
先程青年が発したものと、同じ言語で言葉を紡いだ。

「コレなら、解るか？」

そう言つて、『日本語』で問いかけてきた女性の姿に、俺は驚きを隠せなかつた。つい先程まで、これまで俺に話しかけてきた人達と同じ言葉を使つていた人間が、急に日本語を使つたんだ：驚かない訳が無いだろう。

それに：訳の解らない言葉を使つて何かを質問してきた時。

何故かは解らないが、この人に対して嘘を吐くことは不可能だと理解出来た。

「ああ…解る。アンタは、日本人なのか？」

「ニホン？つちゆう所が何処かは知らんけど、ウチはアンタの言うのとは違うで」

女性の答えに「そうか…」と小さく呟き小さく肩を落としながらも、念の為確認を頼むと、彼女は近くに居た金髪の少年らしき人に声をかけ、何かを話し始めた。

そして、その人が部屋から出るのを確認するや再び俺へと視線を移し

「さて、それじゃあ話してもらおか？アンタが一体何処の何者なんか」

薄く、それでいて鋭く俺を見据えながら、そう口にした。

「……そうか」

ロキが青年と会話を始め、数分が経過した。

フィンはロキから「ニホンという地名を地図で調べてくれへんか？」と頼まれた為、今部屋に居るのは青年を除くとテイオナとリヴェリア、ガレス、そしてロキしか居ない。

「それで、何か解ったのか？」

二人の会話を見守っていたリヴェリアが、ロキへと硬く閉ざしていた口を開く。

「まあな、正直ウチもこういったのは初めてなんやけど」

リヴェリアの質問にロキは答えるが、その表情は何処か整理しているような、悩んだ表情を浮かべている。

「まあ、話すのはフィンが戻って来てからで…」

「それは問題ないよ、ロキ」

未だ確証を持っていないようなロキの物言いに三人は怪訝な表情を浮かべるが、部屋

に入ってきたフィンの姿に注目する。

「おかえりく…で、どうやった？」

「ロキに頼まれたとおり、ニホンという地名を調べてみたけど…どの地図にも、そんな名前の場所は無かったよ」

漸く帰ってきたフィンへと確認をとったロキは、予想通りの答えに額に触れながら天井を見上げた。

「ねえ、私たちにもそろそろ教えてよ」

「お主だけで納得されても解らんぞ」

その様子に不満の声を洩らすティオナとガレスの声に、ロキは「わかった」と呟いて口を開いた。

「まず、コイツの言葉が解らんかった理由についてやけど…それは当然や。コイツ…タケシっちゆうんやけど、タケシの言葉は『この世界の言葉やない』んやからな」

ロキの発した言葉にティオナとガレスは首を傾げるが…フィンとリヴェリアは、何か気づいたようや表情でロキを見る。

「…それは、フィンに頼んだ事と関係があるのだな？」

「流石リヴェリアやな…タケシが居ったっちゆうニホンってのは、海に囲まれた国らしいけど」

「でも…そんな国は、地図には無かった」

リヴェリアの言葉に頷きながらロキはフィンを見やると、彼は答えるように小さく頷く。

「それに、オラリオやダンジョン…ましてや、ファミアの事を何も知らんやつた」

そう言うときロキは一旦話を区切り、四人を見て再度口を開き

「全ての話を聞いてウチが出した結論はこうや…タケシは、此処とはまるで違う世界」

「言うなれば…異世界から来た人間たちゆう事や」

## 漢の決意

「アンタの居ったニホンっちゅう国は、この世界にはない」

轟剛士がロキから齎されたのは、俄かに信じがたい真実だった。

それもそうだろう、懂れていた男と決闘を行った末に川に落ち、目が覚めたら其処は異世界だったなど三文芝居のような話だ。

だが…剛士自身は何処か納得した表情でロキの話聞いていた。

「…思つたより冷静やな」

「此れでも驚いている…だが、目が覚めたら見慣れた車やビルもない。更には全く言葉も通じない…となれば、違う世界に来てしまったと考えれば納得もいく」

驚きの余り茫然自失となる事を予想していただけに、剛士の反応にロキは肩透かしを食らった。

「何や、他の国に来たっちゅう考えは無かつたんか？」

「それなら、漂着する前に溺死している可能性の方が高いだろうな…」

ロキが提示した可能性を否定すると、剛士は改めてロキへと口を開いた。

「それで…俺が元の世界へ帰れる可能性は、どのくらいある？」

「…」

剛士の質問に微かに目を開けたロキは、少し考える素振りを見せると、言いにくそうに言葉を紡ぐ。

「…現時点では、ゼロやな。ウチも下界に降りて来て其れなりに長く暮らしとるけど、此処とは全く違う世界から来た人間つちゆうのはアンタが初めてや」

ロキの答えに剛士は考える。

脳裏に過るのは、日本に居る家族や、自分を慕ってくれた男達

彼らは、きっと自分を心配して居るだろう。

気づかない内に、剛士の中には帰れないかもしれない、という事への焦りが生まれていた。

「其処で、や。タケシ…アンタに一つ提案がある」

その心情を察してか、ロキは剛へと笑みを浮かべて声をかけた。

「元の世界に帰る方法が見つかるまで、ウチのファミリアに入らへんか？」

「…ロキも人が悪いね」

「ん〜？何の事や？」

明日、改めて答えを聞くと剛士に伝え其々の部屋へと戻る途中。

ロキの背中へとフィンが声をかけた。

「帰る方法が見つかるまで、それって言い換えたら『いつ戻れるかは解らない』って事だよね？」

「方法を探すのは嘘やないからなあ…それに」

フィンの鋭い指摘に対してもロキは飄々とした態度を崩さない。

「それどころか。」

「全くの異世界から来た人間や、そう簡単に手放したくないやん？」

そう言って嗤うロキは、まるで新しい玩具を与えられた子供のように目を輝かせてい

た。

ロキからの提案を聞いた俺は、一人ベッドに寝転がって考えていた。

彼女は、俺が元の世界に帰る方法を探してくれると言ってくれた…だが、それは何時になるかは解らない。

その間、ファミアリアの一員としてこの世界で暮らしてはどうだ、と言われたのだが…そんな悠長に構えていて良いのだろうか。

もし、何十年も先と言われたら…。

そんな一抹の不安を胸に、俺の意識はゆっくりと沈んでいった。

「……」

なんだ……？

「…、お…」

誰かの声が聞こえる。

いつたい、誰の……？

「……おこ」

嗚呼……この声は。

忘れるわけがない、この声は……俺が憧れた、あの男の……！

「……漸く目を覚ましたか」

目を開けると、薄暗く、何も無い場所に俺は立っていて。

俺の目の前には、目標としていた男が立っていた。

だが、その姿は最後に見たときとは違う。

あの時、スーツを着ていた男は今、俺が着ているような改造学ランに身を包んでいる。

「…お前さんは、何時まで燻ってるつもりだ？」

俺の前に立つ男は、静かに…だが、確かめるような口調で俺に問いかける。

「俺は言った筈だぜ、俺を超える漢になってみせろって」

そう言うと、男は俺の横を通って何処かへと歩いていく。

光に照らされた先へと向かう途中、男は少しだけ俺の方へ視線を向け

「…頂点<sup>てっぺん</sup>で楽しみに待ってるぜ」

小さく笑みを浮かべ、やがて光の中へと消えて行った。

「…そうだったな、アンタは立ち上がるのを待つような男じゃあねえ」

一人だけ残された俺は、小さく呟く。

「俺がこうしてる間にも、アンタはどんどん先に行っちゃまうんだよな…だったら…」

「俺も、止まる訳にはいかねえよなあ……！」

長い夜が明け、朝日が昇った頃。

ロキを筆頭にフィン、リヴェリア、ガレスの計四人は剛士の部屋を訪れていた。

「ほお……」

一晩空け、改めて剛士の顔を見たロキは感心したように声を洩らす。

剛士の目には既に昨日にはあつた迷いや焦りはなく、その瞳は力強くロキ達を見据えている。

「ほんなら、答えを聞かせてもらおか？」

「…俺は、アンタのファミリアに入る」

その答えを聞いたロキは小さく頷く……が、次の瞬間、鋭い瞳で剛士を見つめた。

「ならウチもアンタが帰る方法を探すけど……何時になるかは解らんで？」

「構わない……俺が帰るのは、少なくとも今じゃないからな」

剛士の言葉に満足したように笑みを浮かべながら、ロキは再び言葉を紡いだ。

「なら、これが最後の質問や……アンタがウチのファミリアに入って、冒険者になる目的は何や？」

ロキの質問に、剛士は内心遂に來た、と呟く。

昨日、ロキからこの世界について話を聞かされた時、話の中にあつたのだ。

冒険者は、其々に目的がある事を。

其れこそ、金や名誉などの欲望から、種族の再興といった願いまで様々だ。

昨日までなら、剛士は己の目的を口にする事は出来なかつただろう。

だが、今は違う。

ゆつくりと息を吸い、吐き出すと剛士は決意を固めた表情でロキを見据え

「…日本にいる、ある男との誓い…男の頂点に立ち、その背中を超える為だ」

力強く、そう口にした。

剛士の目的を耳にしたロキは、目を丸くした。

此れまで出会った人間達は、金や名誉を欲する者、己が種族の再興、只偏に強くなる為といった目的を口にした。

だが、この男は！

もしかしたら帰れないかもしれない世界にいる誰かとの誓いの為に！

男の頂点という、何処まで歩けば辿り着くかも解らない路を歩もうとしている！

それを理解したロキは、小さく身体を震わせ……やがて、己の中のダムが決壊したのか大きな声で笑い始めた。

「面白いやん！アンタが目指す場所への歩み、ウチらが見届けたる！」

そう言いながら、期待を込め、目を輝かせる彼女は剛士へと高らかに叫んだ。

「ようこそ！ロキ・ファミアアへ！」

## 特訓開始！

「ちよつと待つてくれないか？」

剛士の思いを聞き、ロキはそれを歓迎しファミリアへの加入を決めた。

だが…そんな歓迎ムードに水を差すような声が、部屋に響いた。

「なんや、フィン…タケシがファミリアに入るんは反対か？」

そう呟き、ロキは待つたをかけた存在…フィンへ視線を向ける。

その表情はまるで好物に有り付こうとしたのに待つたをかけられ不服そうな、ムスツとした表情だが…しかし、普段は薄く閉じられている瞳は鋭くフィンを射抜く。

「僕個人としては、彼の事情も解っているから寧ろ歓迎だよ…でも、そうだね。ファミリア団長としては、彼の加入はまだ反対だ」

「…聞かせてもらおか」

自身の視線に臆する事なく向かい合うフィンの言葉に含まれた真意をロキだけでなく、リヴェリアやガレスも既に見抜いている…だが、敢えて。

ロキはフィンへと続きを促した。

「仮に今、彼をファミリアへ入れたとする…でも、今の彼はコミュニケーションが取れる

相手はロキだけだし、オラリオの文化や文字、ましてや常識を知らない」

「そんな人間を「神が認めた」という理由だけで加入させて、団員や入団を希望する者達が納得すると思うかい？」

フィンの言葉はファミリアの団長として尤もな意見であった。

ロキ・ファミリアと言えばオラリオでも二大勢力と噂される程に大規模な探索系のファミリアで、それ故に入団を希望する者も後を絶たない。

更に言うなら、彼らの行う遠征は深層というダンジョンでも深く、より強いモンスター達の現れる場所。

そんな場所において：いや、たとえば上層だとしても、コミュニケーションが取れずオラリオの事を知らない剛士が一人加わるだけで連携に支障を来し仲間の命を危険に晒すリスクが高い。

それに、ロキが認めたからという理由で仮に入団しても団員や入団希望者達からは快く思わない人間が少なからず現れるだろう事は想像できる。

「やったら、どうするんや?」

ロキは、それを解っていて、剛士をファミリアへと誘った。

そして、それに対してフィンが反対する事も。

その上で、ロキはフィンに問うた。

団員や入団希望者、他のファミリア達が納得できるような、剛士が入団する資格を持つ人間であると知らしめる為の条件を。

「…彼の来歴、思いは解った。そうしたら…そうだね、彼の覚悟を試そうか」

「来月に行われる入団試験…それまでに、オラリオに関する事、読み書きから会話を含む全てを覚えて貰おうかな」

「…それで、アレ…というわけね」

剛士とロキ達の話し合いから、更に1日が過ぎ。

彼を最初に発見し、保護したアイズ達にはリヴェリアから剛士の今後について話がされた。

そして…今。

剛士に用意された部屋のドアから中を覗くアイズとヒリユネ姉妹、レフィーヤの眼前には、無数の本に埋もれ机に向かう剛の姿があった。

彼の両隣にはそれぞれ教師役のリヴェリアと唯一言葉が解り、コミュニケーションが可能なロキが立ち、本に書かれた内容や文字を教えている。

積み上げられた本も、内容は様々で一般的な教養を教えるものから、幼い子供が読む御伽噺まである。

「でも、フィンも酷いよね。タケシに一ヶ月で読み書きから会話、オラリオの事まで全部覚えろってさ」

一心不乱に本を読む剛士の姿を見ていたティオナがポツリと呟く。

彼女自身、幼い頃に勉強をして数ヶ月で共通語の読み書きが出来るようになったからか、その頃の自分と今の剛士を重ねて見ていた。

だが、僅か数ヶ月で読み書きを覚える事が出来たのは、読み書きは不可能でも会話が可能という下地があつたからである。

それにひきかえ、剛士は読み書きはおろか会話も出来ない。

そもそのスタートラインが違うのだ。

「馬鹿、リヴェリアが言つてたでしょ？ 団長は本当に1ヶ月で全部覚えれるとは思つてないって」

想い人を悪く言われたからか、口を尖らせるティオナを軽く睨みながらティオネが言葉を返す。

ティオネの言つた通り、実際の所フインは剛が僅か1ヶ月で全てを覚えられるとは考へていない。

それはフインだけではなくリヴェリアやガレス、ロキも同様だ。

では、何故フインがこのような条件を出したか…それは、先に言つたように剛士の覚悟を試す事が目的である。

敢えて極端に短い期間の中で、どれだけの事を学び、覚えようとするか。

神の前では嘘は言えない…だが、それが真実であれ、本気で取り組むか否かは神すら分からない。

故に、この機会に剛士が入団…否、オラリオで生きていく事に対して本気かを測ろうとしている。

と、不意にドアが開かれ中からロキとリヴェリアが出てきた。

「お前達…覗きとは趣味が悪いぞ」

「あ、あはは…」

リヴェリアの言葉に、テイオナ達は思わず後ずさる。

そこまで強く睨まれた訳ではないのだが、悪戯が見つかった子供のように視線を右往左往させるばかりだ。

「リヴェリア」

そんな中、アイズがリヴェリアへと声をかけた

「あの人は…どう?」

「…まだ初日だから、と言うのもあるが難航しているな。だが…」

アイズの言葉にリヴェリアは自身が出て来た部屋へ視線を移す。

「学ぼうとする姿勢や意欲は十分……これからどうなるかは、アイツ次第だな」

少し空いた隙間から見える、自身が休憩を言い渡したにも関わらず書物と睨めっこを行なう剛士の姿に小さく笑みを浮かべた。

ロキと……たしか、リヴェリアだったか。

彼女たちから与えられた本を読む……と言うよりも眺めていた俺は、視線を外し力が入っていた目を休めようと目頭を揉む。

（異世界……と言うだけあって、まるで解らんな）

書かれた言葉の中から単語を抜き取り、意味をロキから教わり紙に写す。

そんな単調な作業だけで今日が終わってしまった。

フィンという男から言い渡された期日は僅か一月。

それまでに、読み書きからロキ以外との意思疎通…そして、この世界について知らなくってはならない。

匙を投げたくなる気持ちは僅かにある…だが。

「高い壁ほど乗り越えがいがある…そうだろうか？」

窓の外に広がる星空

こことは違う世界だが、同じように高く先の見えないものへと歩み続ける背中を思い浮かべ、俺は再び本へと視線を移した。

「…なんだ、この騒ぎは」

剛に文字の読み書きを教え始めて3日目の朝。

朝食を摂ろうと食堂へ来たリヴェリアは目の前に広がる光景に驚いていた。

そこには、既に朝食を摂りにきた他の団員達がアイス達の集まるテーブルに集まっている。

それならば、何時もの見慣れた光景の一つ…なのだが。

その中に、明らかに異色な色が混ざっていた。

周り比べて一回り大きく筋肉質な身体に黒い衣服を纏う男…轟剛士が、アイス達と食卓を囲んでいるのだ。

「あ、リヴェリアー!」

ふと、自身の視線に気づいたのかティオナが振り返り此方へ手を振る。

周りから集まる視線に軽くたじろぎながらも、平静を取り戻したりヴェリアは集まる団員達の間を縫ってティオナ達の座るテーブルへと足を進めた。

「これは、いったいどういう状況だ?」

「?…どういうって…タケシと話してたんだ」

その言葉を聞いた当初、リヴェリアはティオナが発した言葉が理解出来なかった。何故か：それは、リヴェリア自身が一番理解している。

剛士が共通語の読み書きを開始したのは、ほんの3日前。

簡単な単語を教え、その読み書きだけでも精一杯だった彼がティオナ達と会話など、まだ不可能なのだ。

改めてテーブルを見てみると、テーブルの上には食事と、他にあるものと言えば紙とペンだけ。

そこで、リヴェリアは気づいた。

紙には、いくつもの言葉と単語が書かれている。

その文字も、それぞれに癖があり：中でも一際拙い筆跡の単語が目についた。

「まさか…筆談を、していたのか？」

「凄いいよね。リヴェリアに文字を教わってからずっと、こうして字を書いて練習してたんだって…ほら」

呆気にとられるリヴェリアに、ティオナは10枚以上もある紙束を渡す。

そこには、何十…否、何百回と同じ単語が繰り返し、所狭しと書かれていた。裏返してみると、また別の単語が。

それが1枚のみならず何枚も…中には、文章の組み立て方が滅茶苦茶な物もあったが、それも次第に改善されている。

(これだけの量…私とロキが付いて教えた時間以外でも、ずっと読み書きを続けていたと言うことか)

僅か2日で教えた言葉は、日常で使うため特に教える必要のあった単語だけで、文法はまだ教えていなかった。

だが、剛士はそれこそ寝る間も惜しんだのだろう。

本を読み続け、教わった単語を照らし合わせた結果、未だに粗さはあるが自分の力で文章を組み立てる事をやってのけた。

(フィン…私達の予想は、外れるかもしれんぞ)

紙束から視線を外し、ティオナ達と拙い筆談を行う剛士を見たりヴェリアは、これから先…自分達の予想を裏切るであろう男の姿に笑みを深めた。

言葉の組み立て方が英語に似ている事に気付き、時間は掛かるが意思を伝える事が可能となって以来、リヴェリアの授業はより密度を増した。

名詞や動詞といった単語を教わるのみだったのが、接続詞や疑問形、否定形が加わった事でより実践的な文章の作り方となり、それと並行して会話の訓練も開始された。

読み書きが出来ても会話が出来ない、と言うのは諸外国の言葉を覚えた時と同じだが、これまでとはまた違う発音の仕方や口の使い方だったため、読み書き以上に時間がかかってしまった。

「いや、それでも2週間で話せるようになるんは早すぎるて」

とはロキの言葉だが、言葉が通じない環境に立たされれば、人間は環境に適應しよう

と躍起になるものだ。

会話が可能となつてからはリヴェリアの授業は終了となり、残り2週間はフィンからオラリオの事について教わった。

貨幣価値については…日本円に換算してしまいがちになる不安もあるが、そこはまあ、なんとかなるだろう。

ファミリアの主な収入源は、依頼クエストの報酬とダンジョンに巣食うモンスターが落とす核…魔石やドロップアイテムらしい。

まるでRPGのような話だが…此処は現実。

欲を出し命を落とす者も少なくないというフィンの忠告は忘れないようにするべきか。

そうして、長いようで短い怒涛の1ヶ月が過ぎ。

ついに、ロキ・ファミリアの入団試験を迎えた。

## 入団試験

ロキ・ファミリア

迷宮都市オラリオに存在するファミリアの中でも一、二を争う探索系ファミリアの拠点にある広場には、早朝であるにも関わらず多くの人が集まっていた。

人種、性別、年齢、背格好。

凡ゆるものが違えども、彼ら、彼女らの思いは共通していた。

今日はロキ・ファミリアの入団試験

轟剛士の、オラリオでの第一歩を決める日でもある。

「今回も沢山の人が集まったね」

広場が見渡せる部屋から試験開始を待つ人々を眺めながら、ロキ・ファミア団長：  
フィン・デムナは笑みを浮かべる。

この中から、自分達と苦楽を共にする仲間が選ばれるのだ。

「しかし、あの坊主には驚かされたの」

フィンの隣に立ち、受験者達を眺めるガレス・ランドロツクは人々から離れ一人佇む  
男：剛士を見つける。

喧騒の中、目を閉じて木に背中を預けるその姿を、他の受験者達は怪訝な表情で眺め  
ているが、当の本人は気圧された様子を微塵も見せていない。

余裕…とは違う。

やれるだけの事を行い、万全の状態で挑むべく精神を穏やかに、しかし熱い覚悟を胸  
に秘めている。

「僕も驚いたよ……まさか、本当に1ヶ月で全てをマスターしたなんてね」

「私としては、乾いた海綿スポンジのように吸収するものだから、教え甲斐のある生徒だったがな」

この日を迎えるまでの1ヶ月間、驚くことばかりだったフィンはさも当然とばかりにやつてのける剛士の事を思い出して苦笑し……同時に、教師役を担い手塩をかけて教えたリヴェリアは生徒の成長に笑みを浮かべた。

「でも……彼にとって、本当の第一歩は此処からだ」

ロキは入団させる気であり、剛士の立場から他のファミリアに知られるわけにはいかないとは言え、試験を受ける以上臆目で見られるわけにはいかない。

フィンの言葉に改めて、轟剛士の存在を見極めるべく3人は表情を引き締めた。

「…来たか」

定刻となり、拠点からフィンを筆頭にガレスやリヴェリアが現れた途端、周りの喧騒がたちまち水を打ったように静まり返る。

「これより、ロキ・ファミリアの入団試験を開始する。試験内容は1対1の模擬戦と面接、武器は此方で用意したものを使用してもらう…何か、質問は？」

リヴェリアによる開催宣言と簡単な試験内容の説明を受け、周囲の気配はより張り詰めたものへと変わっていく。

特に質問をする姿も無いことから、辺りを見回して確認したリヴェリアが合図を行い、サポートを任された団員達が、訓練用に使う木剣や棍を持って所定の場所に置いていく。

「では、名前を呼ばれた者から前へ」

ベート・ローガが轟剛士を見たのは、剛士がこの世界を訪れて2週間が経った頃のことだった。

ベートが剛を見た時に感じたもの……それは、不快感だった。

入団もしていない、何処の誰とも解らない男がファミリアの中に居て……尚且つ、アイズ・ヴァレンシュタインと共に居た事がベートにとって何よりも耐え難いものであった。

身の程を弁えない奴、と突っかかるうとしたが、ロキに止められたうえに常にフィンやリヴェリアといった幹部達が共に居た為に手を出せず歯噛みするばかり。

「そんなに、アイツが気に入らんか？」

苛立たしげに顔を歪ませるベートにリヴェリアが声をかける。

「入団もしてねえ、何も知らねえ雑魚がロキに認められただけでファミリアに居るのが気にいらねえんだよ」

胸に抱えた不快感と苛立ちを隠そうともせず吐き出すベートの姿に、リヴェリアは

小さく溜息を吐いた。

フィンが懸念したように、団員達の中にも剛士の事を懐疑的に見ており、不満を抱えている者が現れている。

ベートがその中でも最たる者だろう。

今はまだ抑えられている方だが…沸点の低いベートだ、いつ破裂してもおかしくない。

「…再来週に行われる入団試験、それにアイツも参加する。そこで、アイツが本当にお前の言う雑魚かどうか見極めてみる」

「…ふん」

リヴェリアから言われた言葉を思い出し、ベートは小さく鼻を鳴らす。

見極めろ、とりヴェリアは言ったが所詮雑魚は雑魚。

本来なら、見る価値もないと一笑して終わる筈だった。

しかし。

ベートの中にある何かが、轟剛士という男から目を離すなど訴え続けていた。

(今回もあまり収穫はなさそうだね)

実技試験の試験官を行っていた僕は、内心溜息を吐いた。

受験者達は僕の見目や実技を終えた為か気が緩み、軽口を叩く者が現れ始めた。

それも、他の受験者達へと伝播し、悪い影響を与えている。

「次、タケシ・轟」

そんな時、リヴェリアによつて次の受験者：彼の名前が遂に呼ばれた。

人を掻き分けて僕の前へと姿を現した彼：タケシの表情は周りの影響もどこ吹く風と言わんばかりに真剣そのもの。

その体から放たれる気迫は例えるならば、まだ未踏の階層へ挑もうとする冒険者に近く。

彼の気迫に気づいた者達は一人、また一人と静かになり：気づけば、あれだけ軽口を叩いていた受験者数は静まり返っていた。

(これは…)

改めてタケシを見て、小さく笑みを浮かべる。

これまで、僕達はタケシの行動に驚かされてきた。

たった3日で文字の読み書きを覚え、2週間が経つ頃には拙いながらも会話ができるようになり。

最終日には、僕が出した難題を全てクリアした。

そして、今。

周囲を気迫だけで圧倒する姿に、僕は。

来歴やロキの手前なんてものを抜きにして

彼がオラリオの街で僕達に何を齎し、何処へ行き着くのかを見たくなった。

「…では、両者構え」

リヴェリアも同じことを感じたのだろう。

笑みを浮かべそうになるのを抑え、号令をかける。

此方が棍を持っていることに対して、タケシは軽く腰を落とし、拳を構える。

徒手空拳による格闘戦……それが、彼のファイトスタイルなのだろう。

「始め！」

掛け声と同時に、地面を蹴る。

両者の間が縮まる中、僕は棍を持つ手に力を込めた。

正面から受けて立つ……その意思を込めた瞬間、視界を黒が覆い尽くした。

（目くらましか……！）

視界を覆ったもの……それが、タケシが普段着ていた衣服である事を確認して棍で叩き落とし、すぐさま彼の姿を確認する。

目の前には居ない事がすぐに解り、左右を確認しようとした……次の瞬間、前へと飛び出した。

直後に背後から風を感じた事から、後ろに回り込んだのは確実だ。

しかし、左右から音は無かった……となれば、方法は一つしかない。

「まさか、頭上を飛び越えて背後に回り込むとはね……驚いたよ」

「その割には、落ち着いてるじゃねえか」

「まあ、これでも踏んで来た場数が違うからね……！」

そこから先は、互いに言葉は不要だった。

左右の拳から連続で放たれる拳に、丸太のように太い脚から繰り出される蹴りは身体の大きさに反して速く、風を切る音からもその重さが伝わってくる。

体捌きも上手く、武器のアドバンテージを潰そうと、攻撃を恐れずに懐へ積極的に潜り込み、反撃もしつかりと見極めたうえで躲し、防御している。

そんな互いに一步も引かず、有効打を与えられないで膠着した応酬に、この場に居る誰もが魅入っていた。

互いに再び距離を取り、構えをとる。

このままでは、後の受験者に響くという思いが過ぎり始める中、不意にタケシが構えを変えた。

特に大きな変わりはない……しかし、握りしめていた拳を解き、体に入っていた力が抜けている。

有り体に言うならば、自然体。

先程までの構えが「動」とするならば、今の構えは「静」と言える。明らかに、何かがあるのは一目瞭然だ。

(でも…乗ってみるとしようか…！)

棍を握る手に力を込め、突きを繰り出した。

次の瞬間、視界が急転し

僕は地面に倒れ、眼前にはタケシの拳が寸止めにされていた。

最初は何が起きたか理解出来なかったが、少し考え漸く分かった。

僕は…『自分の力に投げられた』。

タケシは僕の動きに合わせてほんの少し、手を添えただけ。ただ、それだけだ。

「…参った」

恩恵を受けてない人間に本気を出す訳にいかないから、本気は出さなかつたけど…全力で挑んだ。

そのうえで、僕はタケシという男に負けた。

嗚呼…悔しいな。

フィンの宣言と同時に、張り詰めた緊張感が解けた瞬間…割れんばかりの歓声が広場に響いた。

辺りを見回すと、他の受験者達だけでなく、ファミリアの団員達までもが俺とフィンを賛辞していた。

あまり無い光景にたじろいでいたが、リヴェリアが場を鎮め改めて試験が再開される。

俺以降の受験者、そしてフィンまでもが気を引き締めて試験に挑んだ事で、滞りなく実技試験は終了した。

そして、次に行われるのは面接…なのだが

「まずは実技試験お疲れさん、こうも盛り上がったんは今までにないで！」

応接室で試験官として待ち構えていたロキがこれ以上ない笑顔を浮かべていた。

「今回は勝たせて貰ったが…実際のところ、何度も負けていても可笑しくない所があつ

た」

「せやけど、勝った事に変わりない。そこは受け止めなアカンで？」

ロキの、我が子を論すような言葉に小さく頷くと気を取り直したのか、閉じられていた目を微かに開いた

「ほんなら面接に移るけど、ウチからの質問は2つや…タケシ、アンタは冒険者になつて何処を目指す？」

「最初に言つた頃と変わらな…男の中の男、その頂点だ」

俺の答えに、ロキは嬉しそうに小さく何度か頷き…鋭い瞳で俺を見る。

「そか、そんなら…アンタにとつて、それはどんな存在や？」

ロキの質問に、少し考える。

あの男の姿、その背中を思い出し…そこからイメージするものを紡いでいく。

「深く根を張り、山より聳え、困難に屈しない太い幹を持ち…その太い枝で来るものを受け止め、そして、支え育む大樹のようなものだ、思う」

「そか。ウチからの面接は以上や、後は合否発表までゆっくりしとき」

拙い表現だったが、ロキにとつては満足のいく答えだったのだろう。

顔を綻ばせるロキに一礼して、俺は応接室を後にした。

全員の面接を終え審議に1時間掛かっただろうか。

入団試験を受けた全員が、再び広場に集まっていた。

その表情は堅く緊張しており、合格か否か…結果に対する不安に彩られていた。

「今回の試験はこれまで以上に甲乙つけがたい者達ばかりだったが、全員合格という訳にもいかん…厳正な審査の結果、合格した者の名前を読み上げる」

総評を終え、進行を担当するリヴェリアが名前を読み上げる度に、受験者達は様々な表情を浮かべる。

歓喜、安堵、落胆…そんな表情を周りが浮かべる中一人、また一人と合格者が呼ばれていき、そして。

「…タケシ・轟。以上を以て、今試験の合格者とする」  
剛士の名前が、静かに呼ばれた。

## ステイタス

冒険者を志す者には、血気盛んな者も少なくない。

そのため、ファミリアの入団試験で不合格を言い渡された時に逆上した結果取り押さえられ、門戸を叩く事を禁じられるという事が過去何度かある。

それを経験した事から、警備に当たっていた門番達は戸惑いを隠せずにいる。

「ダメだったかあ……でも、アレだけ凄いのを見せられたら納得だな」

「ああ……アレと比べたら、俺達もまだまだか」

門を潜り、ファミリアを後にする者達は皆口々に不合格だった悔しさを零している。

しかし、その表情はこれまでの試験で不合格だった者達とは明らかに違い、不満や妬み、僻みといったものは無く……全員が共通して、次の試験に向けた強い決意と、何かを見出したような清々しくも凛々しい表情を浮かべていた。

「まずは試験合格おめでとう。これから君達はロキ・ファミリアの一員として恩恵を授かる事になる」

入団試験を終え、俺を含めた合格者はロキの部屋の前で、フィンから説明を受けている。

ファミリアに入団したものは、主神から恩恵を授かり、初めて神の眷族となる。

恩恵には基本アビリティと発展アビリティ、人によつてはスキルや魔法が発現する者もいるらしい。

冒険者のステータスは基本的に日本における個人情報と同じ扱いに近く、ファミリアの間でも詳細を知る事が出来るのは限られるし、他のファミリアに対しての公開も厳禁という。

「ロキも待っているし、早速始めていこうか」

説明はまだ途中だったが、フィンは時間を確認するやそう切り出し、一人ずつ順番に

ロキの待つ部屋へと入っていく。

「改めてタケシ、合格おめでとう。ファミリア団長として、そして僕個人として君を歓迎するよ」

一人、また一人と恩恵を授かり部屋を後にしていき残るは俺だけとなった時、フィン  
は俺に向き合い笑顔を浮かべた。

「今回は勝ちを譲って貰ったが…次は、本気のお前を超えてみせる」

「こちらこそ、あの場に出せる全力を以て挑んで負けたんだ…今以上に鍛えて待っているけど、そう簡単に勝ちを譲らないからね」

互いにそう言って固く握手を交わす。

だが、その目は笑顔を浮かべながらも闘志を燃やし、互いを好敵手と見做していた。  
「…さて、では行っていく」

どちらとも無く手を離し、俺はロキの部屋へと入る。

「待つとつたで…ほっほーう、どうやらフィンにライバルやと認められたな？」

部屋に入るや否や、俺の表情を見たロキはニンマリと笑みを浮かべる。

「このファミリア…いや、この街の冒険者は皆超えるべき壁だ」  
「ほうほう…大きく出たな。ま、とにかく恩恵を刻もか」

そう答えると、ロキは笑みを深めて何度も頷き俺に切り出してきた。  
その言葉に頷くとロキに背中を向けるように座り学ランを脱ぐ。

「しっかし、すごい身体しとるな…まだ16やったっけ？」

「10年くらい鍛えてきたからな…だが、これでもまだ未熟だ」

恩恵を刻みながら呟くロキの言葉に答えながら、俺は右手を見た。

ここまで鍛えてきても、あの男には届かなかった。

それどころか、この街には俺以上の力を持った奴らが山のようにいる。

漢の頂…それは、どれだけ鍛えても先の見えない、高く果てのない道のりだ。  
立ちはだかる壁も、この世界に来てから一気に増えた。

だが…

(いつか必ず、俺はその頂へ！)

たとえ歩みが遅かろうと、回り道をしようと歩き続ければそれだけ前へと進む。

だからこそ、この道に待ち受けるものに期待して笑みが零れた。

「んなああああ!？」

しかし、不意に聞こえたロキの素っ頓狂な叫びに驚き俺は肩を震わせた。

「いやー、スマンスマン」

「いきなりデカい声を出すな…、まだ耳が痛いぞ」

頭を搔きながら謝ってくるロキに軽く呆れつつ、俺は渡された紙を見る。

アビリティは恩恵を刻まれた時点を0として、そこから鍛錬やダンジョンでの経験が上乘せされるらしい。

フィンからそう聞いていたから、驚くことはなかったが…アビリティより更に下。

俺に最も馴染み深い日本語で、そこにはこう書かれていた。

スキル まだ見ぬ頂

・ 思いが続く限り継続

・ 思いの丈でステイタス上昇にプラス補正

・ 超えるべきものの数に比例してステイタス上昇

不屈

・ 逆境に立たされる度能力補正

・ 心が折れない限り効果持続

「これは…」

「スキルちゆうのは、ソイツの歩みや思いが反映されたもんや…せやけど」

初めからスキルが二つ発現している事に驚く俺へロキは答えるが、次の瞬間視線を鋭くした。

「タケシに発現したそのスキルはな…これまでのオラリオの歴史上、似たような能力は無い。つまりレアスキルや」

ロキの言葉に、改めてスキルの内容を確認する。

思いの強さ、超えるべきものに比例して…ということとは。

「漢の頂つちゆう目指すもんを忘れんで、しかもライバルが居れば居るほど強なる…成長スピードは人並み言うても十分チートやん！」

「そう言われても、困るんだが…」

頭を抱えるロキにそう言われるが、俺は何もしていないから答えようがない。

「兎に角、アンタのスキル欄は隠すで。万が一他のファミリアに知られでもしたら争いの種になりかねんからな」

確かに…他に見えないものとは人を惹きつけ、同時に禍を引き寄せるものだ。

念の為、ロキからフィンやガレス、リヴェリアには教えるが他の団員には秘匿するよう釘を刺された俺は部屋を後にした。

部屋へと戻る途中、此方へと歩いてくる影があつた。

灰色の髪に、狼の耳を持った男…確か、リヴェリアが言っていた狼人…ウエアウルフ…だったか。

ソイツは、俺を鋭い目で睨みつけ…そのまま、横を通り過ぎて行つた。

だが、すれ違う時に確かに聞こえた。

『テメエには負けねえ』

「…此方こそ」

そう呟き、通り過ぎて行った男…今の俺よりも強く、遥か先に居るその背中に返事を返し、俺は再び歩き出した。

ロキにより恩恵を刻まれ、晴れてファミリアの一員とはなったが、即ダンジョンへと潜れる訳ではない。

俺は、休暇だったリヴェリアに連れられオラリオのギルドを訪れていた。

「ギルドで冒険者登録を行って初めて、お前は冒険者となる」

隣に立つリヴェリアが、ギルドの門を見据えて言葉を紡ぐ。

「ダンジョンについての説明はお前に就くアドバイザーから教わる事になる…私の教師役も、此処までか」

「…」

今までの事を思い出したのか、感慨深くリヴェリアは呟いた。

確かに、リヴェリアとロキから文字の読み書きを教わった事から始まって…あつという間の1ヶ月だったが。

「まだ俺は未熟だ」

リヴェリアの何処か子供の成長を思い出すような、懐かしくも名残惜しく寂しそうな表情を横目に口を開く

「文字の読み書きに言葉、この街については聞いたが…まだ俺には教わる事が山のようにある。とことん付き合ってもらおうぞ…先生？」

俺の言葉を聞いたリヴェリアは目を見開いて俺を見るが…少しすると、堰を切ったよ

うに笑い出した。

「つ、くくく…どうやら私は、とんでもない奴を生徒にしたようだな…私の授業は厳しいぞ？」

「頂点には力だけじゃ到達出来ん、望むところだ」

互いに顔を見合わせ小さく笑みを浮かべると、俺たちはギルドの扉を開き中へと入っていった。

「まさか、名前の書き方は日本で同じで構わんとはな」

「教える事に熱が入り、つい説明を忘れていた…すまない」

冒険者登録に必要な紙をアドバイザーの…エイナというハーフエルフから受け取って書いている際に名前について指摘を受けた。

どうやら文明レベルは違えども日本と同じような国が極東にあるらしく、そこ出身の冒険者達は日本人と同じ書き方で姓名表記を行なっているらしい。

何故教えてくれなかったのかと思ったが：まあ、そこは頬を染め気まずそうにしているリヴェリアを見たことで帳消しにした。

新しい紙を受け取り、俺は改めてそれに倣い「タケシ・轟」から「トドロキ・剛士」へと書き直して提出。

無事に冒険者としての登録を終えることが出来た。

「…これで漸く、冒険者としてのスタートラインに立った訳か」

ギルドからの帰り道、ポツリと呟く。

改めて、此処からが漢の頂への新たなスタートだ。

「この街に居る冒険者を超えて頂点に立つ、か…私も、先に立つ者として負ける訳にはいかな」

俺の言葉を聞いてか、リヴェリアが俺の前に躍り出た。

「改めて覚えておけ……我が名はリヴェリア、リヴェリア・リヨス・アールヴ。ロキ・ファ  
ミリアの冒険者【九魔姫<sup>ナインヘル</sup>】の二つ名を持つ、お前と共に戦場を駆ける者であり……お前が  
超える壁の一つだ」

## 地下迷宮

「それでは、新しい入団メンバーを歓迎して…乾杯！」

オラリオには、様々な酒場が存在する。

値段の設定も様々で、そこに集まる人々も、また様々。

そんな酒場の中でも、『豊穣の女主人』を知らない者はオラリオを訪れたばかりの新参者くらいだろう。

元Lv. 6の冒険者であった店主を始めとして、店員として住み込みで働く者達は皆並みの冒険者では歯が立たない強者揃い。

その実力者揃いの営む酒場はいつからか、「オラリオー治安の良い酒場」と呼ばれている。

そんな豊穣の女主人の一角。

入団試験から1日が経った夜。

ロキを筆頭としたファミリアの幹部陣と、新たに入団を果たした剛士達で歓迎会が行われていた。

その喧騒は、他のテーブルにも負けず劣らず、皆思い思いに酒や食事に舌鼓を打っている。

「なあなあ、タケシは吞まへんのか？」

そんな中、すっかり出来上がっているロキが剛士の下へとジョッキ片手に寄つてきた。

「…俺が居た場所では20歳未満は未成年で、飲酒や喫煙は法律で禁じられている」

ロキの様子に僅かに辟易したような表情を浮かべると、剛士は水の入ったグラスを傾ける。

剛士としては、法律もあるが何より未成年による飲酒や喫煙が発育に悪いことから、自身の成長を妨げる行為を避けている所が大きい。

現に、今手をつけている食事も多く並ぶ皿の中から、現在の体つきや成長に合わせ必要な分という徹底ぶりである。

「なんやつまらんな〜…」

一切折れる様子が欠片も見られない姿にロキは唇を尖らせるが、仕方ないとエールを呷る。

そんな時だった。

「はいよ、お待ちどう」

ロキと剛士の前に、頼んだ覚えのない皿が置かれた。

「んん？ミア母ちゃん、ウチら頼んだ覚えないで？」

「アタシからのサーブिसさ：黒い服に帽子、聞いた通りの男だね」

ロキの言葉に豪快な笑みを浮かべて料理を運んだ女性：ミア・グラントが剛士を見る。

「昨日ウチに来た客にアンタのファミリアのテストで落ちた連中が居てね：それで気になってたのさ、これまでテストに落ちた奴らを見てきたけど、そんな奴らが真っ直ぐな目で話していた男がどんな奴かね」

そう語るミアの瞳は剛士を見極めんとしており、それに対してロキから何も言う事は無かった。

ミアが持つ人を見る目の確かさと：これまで、自身のファミリアに所属する一級冒険者を最目抜きで認めさせた剛士ゆえに、今回も大丈夫だと思ったからだ。

「アンタ、名前は？」

「トドロキ・剛士だ」

「そうかい……タケシ、アンタはこれから何を成す？」

剛士を見据えるミアの視線に鋭さが増す。

その気配を感じ取ってか、つい先程まで騒いでいたファミアの面々だけではなく他のテーブルに座る冒険者、果てには従業員の少女達すら手を止めて二人を見ていた。

「……ある男を超え、漢の頂点に立つ。その為に……まずは、この街の冒険者全員を超える」  
剛士の言葉が静まり返った店内に響き渡る。

「……っ、あはははははは！」

「どれだけの時間が過ぎたか分からない。

が、シン……とした店内にミアの笑い声が聞こえた。

「くはあ……、この街の冒険者全員を、ね……大きく出たもんだよ」

未だに可笑しいのか笑い混じりにミアは剛士の言葉を反芻する。

オラリオには、多くの冒険者が居る。

だが、全員が一朝一夕で強くなったわけではない。

挫折と辛酸を味わい、それでも歩みを止めなかった結果今の場所に立っているのだ。

「今のアンタじゃ足元にも及ばない奴らがごまんと居る…それを解つてて、その道かい？」

「ああ」

ミアと剛士、二人の視線が重なる。

険呑とした空気が漂い、店内に居るロキ以外の全員が固唾を飲んだ。

「ロキ…今日の宴会、アタシの奢りだ」

「…ええんか？」

たった数秒…店内では、数時間にも感じるやり取りを終えたミアが厨房へと向かいながらロキへと告げる。

「未来への投資つてヤツさ。その代わりに、今後ウチを宜しく頼むよ？」

剛士を見やり、小さく笑って厨房へと戻るミアを見送り、ファミリアの面々は互いに顔を見合わせた後にロキへと視線を移す。

全員の視線を集めたロキは剛士、そして団員達を見るや手にしたジョッキを高く掲げた。

「つしやあああ！今日は飲むでえ！」

「今日から、タケシにもダンジョンに入って貰うよ」

歓迎会の翌日、朝食後フィンに呼ばれた俺は彼の部屋を訪れていた。

今日からダンジョンに潜るのは良いとして：何故、俺一人が部屋に呼ばれたのかが分からないでいると、用事があって訪れていたらしいガレスが言葉を引き継いだ。

「お前さんはオラリオに関する知識は得たが、ダンジョンがどういった構造かはしらんじやろ。万が一ファミリアの新入りが迷ったりせんよう、道案内として一人ついて貰うことにした」

ガレスの言葉に、成る程と頷く。

地下迷宮、と言うだけあってダンジョンの中はまた入り組んで迷いやすいのだろう。

この街については事前に勉強をしたとは言え、目標への一歩目から躓いたのでは話に

ならない。

故に、俺はフィン達の厚意に甘える事にしたのだが…。

「久しぶりだね！」

まさか、その相手が…この世界で最初に目にした人物とは、思ってもいなかった。

「高いな…」

オラリオの中央に天高く聳え立つ塔…バベルを改めて、近くで見上げて小さく眩く。

日本にも高層ビルや、日本を代表する電波塔などがあつたから真新しさ…と言うものはあまり無いが、中世のような街並みに天高く伸びる建物は壯観と言える。

「こつちだよ〜」

そんな俺を見て、同伴の相手…ティオナが声を掛けてきた。

「…こつちうして話すのは、初めてか」

「そうだね。アタシもダンジョンに潜つてたからあまり関われなかつたから……でも、今度からはちゃんと言葉も解るし話もできる」

ダンジョンへと続く階段を下りながら、先行するティオナの背中へ言葉を投げかける。

最初に会つた時は、互いに何を話しているのか解らず。

二度目は筆談しか出来なかつたから、読み解くまでに時間が掛かつた。

だが……今はもう、互いに何を話しているのが十分に理解出来る。

それが解つたからこそ、ティオナは改めて俺に向き合い笑顔を見せた。

「同じファミリアの仲間同士、これからよろしく！」

「ああ、宜しく頼む」

助けてくれた礼を込め、俺はティオナと握手を交わす。

「此処から先は安全圏じゃないから、注意してね」

ティオナに先導されて降りた第一階層。

迷宮という名前から想像していたものとは違い、印象としては洞窟の内部に似た雰囲気  
気が漂っていた。

(それにしても…)

辺りをちら、と一瞥する。

見渡してみた所、人の気配はあれどモンスターは1匹も見当たらない。

そんな時、背後から亀裂が入る音が聞こえてきた。

振り返ると、壁しか無かった筈の場所から一本の腕が生えている。

否…腕だけでは無い。

壁の一部が崩れるにつれ、その体が顕になり。

気づけば、俺の目の前には1匹の異形が立っていた。

体そのものは小さく、人間の子供程度だろう。

燻んだ緑色の肌をしたその姿は醜悪とも取れ、忌避感すら感じる

「ゴブリンかあ…今のタケシなら、十分倒せる相手だよ」

背後にいるティオナはそういうが、内心…俺にとつて未知な存在への、僅かな思いが  
あった。

「ふ……っ！」

だが、そんな事はモンスターには関係ない。

俺を視認するや襲い掛かってきたゴブリンの爪を躲し、そのから空きの胴体に拳を叩き込む。

一撃を受けたゴブリンは数mほど吹き飛ぶがすぐさま襲い掛かってくる。

その様子からは強い殺意すら感じ取れた。

改めて、フィンやエイナが言っていた言葉を思い出す。

ダンジョンに棲むモンスターは、冒険者の事情など御構い無しだと。

僅かな気の迷いすら、命を落とす原因だと。

まだ思う所はあるが、今は。

歯を食いしばり、再びゴブリンへと拳を振るう。

何度も、何度も。

最初の何度かは倒れるも立ち上がり、襲い掛かってきたが…終いには、倒れたゴブリンの体に馬乗りになって拳を叩き込んだ。

ゴブリンも暴れ、爪を振るい、腕に噛みつき、牙を突き立ててきたが…その力も次第に弱くなっていき、やがて力無く腕を地面に投げ出した。

瞬間、ゴブリンはその体を塵に変える。

残ったのは、指先よりも少し小さな小石が一つだけ。

だが…一つの命を奪った感触は、いつまでも拳に残り続けた。

「それで、あの調子か…」

タケシがダンジョンに潜って1日目を終えた夜、テイオナから事の顛末を聞いた私は遠目にタケシの姿を見ていた。

普段ならば、食事を終えると軽いトレーニングを行っているのだが、今日はダンジョンから戻り軽く食べて以降、ベンチに座って自身の右手を見続けている。

（奪った命の重み、か…）

ロキから聞いた話では、タケシが暮らしていた世界は大きな争いもなく、モンスター

も居ない世界だったという。

そんな、平和な世界で暮らしてきた人間が初めて……自らの手で他の命を奪ったのだ。その重みというものは、我々には分からないものだろう。

だが……。

「タケシ」

「……リヴェリアか」

拳を見つめていたタケシの元へ歩み寄り、声を掛ける。

私の声に反応しチラ、と肩越しに此方を一瞥するがタケシは再び視線を拳へ移し、閉ざしていた口を開いた。

「この拳を今まで、何度も振るってきたが……自分の意思で、殺したのは初めてだ」  
ポツリと小さく呟くと、タケシは握りしめていた右手を左手で包み込む。

その拳には、未だにゴブリンを屠ったときの感触が残っているのだろう。

「……お前の居た世界についてはロキから聞いている。それで、お前はとうする？」  
「俺は……」

「リヴェリアー！」

部屋へ戻る途中、寝間着へと着替えたテイオナに声を掛けられる。

何の用か…など、聞く必要もないか。

「タケシなら大丈夫だ」

「本当?!良かったあ…」

手短かに結論を告げると、テイオナは安心したように顔を綻ばせる。

今日一日、タケシの変化を身近で見たから心配だったのだろう。

「アイツは強い…力も中々だが、何より心がな」

そう言つて、私は先程…タケシが口にした言葉を思い出した。

『俺は…進み続ける。モンスターであれ、命を奪つた事に変わりはないし感觸にも慣れねえ。慣れる、とか割り切れとか言う奴も居るだろうが、コレだけは慣れちまったらいけねえんだ』

(モンスターでも一つの命。それを奪う重さに潰されず、振り払わず…背負つて進むか)

モンスターが居て、それを倒すのが当たり前な世界に生きてきた私達とは違い、改めて辛く厳しい道を選んだ男……トドロキ・剛士。

その吹っ切れた横顔は力強く……思わず見惚れてしまった事は、誰にも言わないでおこう。

## 勇者

オラリオで一番の派閥を問えば、道行く人は皆ロキ・ファミリアかフレイヤ・ファミリアと答え、論争が起こる。

それほどまでに、この二つのファミリアが大きな勢力という事だろう。

だが。

このオラリオで一番強いのは誰か、と問うてみる。

するとどうだろう。

あれほど論争を繰り返していた者達が皆、口を揃えてこう答えるのだ。

『オラリオで最強は、フレイヤ・ファミリアの「勇者」だ』と。

ダンジョンでの最初の戦いから1週間。

構造を把握してからは、一人で只管に一階層でゴブリンを相手に拳を振るっていた。骨を砕き肉を潰す…命を奪う感触というのは、どれだけの時間を費やしても嫌な物である事は変わらない。

だが、俺は敢えてこの道を背負い進むと決めた。

「…」

腕に残った傷を見る。

忘れもしないあの日、俺が初めて殺したゴブリンから受けた傷は塞いで貰ったが痕は残している。

奪った命がたしかにあつて、ソイツは骨も残らず消えたが、生きる為に抗った事を忘れない為に。

(ヤッ…)

腕から目を離し、散らばった魔石…俺が倒したゴブリン達が唯一残していった物に向けて手を合わせる。

奪った側の身勝手だが、また一つ強くしてくれた事への感謝と命を奪った事への謝罪  
…そして、来世での安寧を祈って合掌し、魔石を拾っていく。

時間を忘れる程に潜っていた為か、ダンジョンに潜る際にテイオナに渡されたポーチ  
が魔石で満タンになった事に気づいた俺は、踵を返して地上へと向かう。

地上へと帰るための階段は、沢山の冒険者が行き来する。

そんな中、俺の視線が不意に動いたのは単なる偶然だった。

ダンジョンへと降りていく冒険者達の中に、一人の男が目に入る。

屈強な身体に背負った剣。

頭部には、人とは違う形状の…猪の耳。

そして、周りに合わせているにも関わらずビリビリと肌を刺激する強者の気迫。

そんな男と、不意に目が合った。

ほんの数瞬、すれ違う際の僅かな視線の交差だ。

やがて、男は俺から視線を外して地下へと向かう。

その背中では、何処か：幼き日に見た、あの男と似ているようだった。

「石を買いたい？」

太陽が頂点に登り切った昼、【豊穰の女主人】の店内に店主であるミアの訝しげな声が響いた。

事の発端は昼食を摂りに訪れた剛士がミアへ石を購入できる場所があるかを問うた事にある。

「ああ……欲を言えば大きく、脆くない物であれば尚良いな。値段は言い値で構わないん

だが…知らないか？」

「そりや、建材にも使われるから知ってるが…」

剛士の言葉を聞いて、ミアは唖る。

建物や構造物の建材として、確かに石は流通しているし購入出来ない訳ではない。

だが…目の前にいる剛士の意図が、ミアには測りかねていた。

「タケシく、そんな物買うより先ずは装備を整えるのが先じゃないかニヤ？」

その横から、二人の話を聞いていた給仕のアーニヤが声を掛ける。

よく見ればアーニヤだけでは無い。

忙しい時間帯が過ぎ、少し落ち着いた店内で片付けをしていたクロエやリユー

いつからか顔馴染みとなった街の人たちもがアーニヤの言葉に頷いていた。

更に言えば、剛士はこれまでもアドバイザーとなったエイナやファミリアの仲間達からも最低限の防具は揃えろと口酸っぱく言われ続けている。

「…いや、俺はこれで良い。これが良い」

それでも尚、剛士は折れる事なく着の身着のまま…改造学ランの姿でダンジョンに潜り続けていた。

それ故、その姿を見た他ファミリアの冒険者達からは「死に急ぎ」と揶揄されている。

「…一つ聞かせとくれ。アンタは石を買って、何をするつもりだい？」

剛士の一切折れない様子に深く溜息を吐き、ミアは問いかけた。

強情な男という事は、たった1週間の付き合いで十分に理解出来た。

だが、目的と意図を知らなければ教える気も毛頭なかった。

「…慰霊碑を作る」

「本当、不思議な人ですよね」

剛士が出て行った店内で、カウンターを拭きながらシル・フローヴァが口を開く。

その言葉を聞き、改めてミアは先程剛士の言った事を思い出す。

『命に貴賤無し。たとえ、ダンジョンから生まれたモンスターであれ一つの命を俺は殺

めたし、これから先も奪う：其れを忘れず、奪った命を弔う為に奴らの墓を作る』

その言葉に、店内に居た誰も、何も言えずにいた。

誰一人として、剛士の言葉を嘲笑う事が出来なかつた。

今まで出会つてきた冒険者も、自分達もモンスターは倒すべき敵であり収入源の一つとしか考えていなかつたのだ。

だが、剛士の言葉を聞いた事で：冒険者であつた者達は、自らの足元に築いたモンスターの屍の山を直視させられた。

果たして、今を生きる冒険者達の中に何人その事を理解し、受け止めている者が居るだろうか？

「モンスターもアタシ達と変わらない命の一つ、か……」

そんな中、レベル1の駆け出しでありながら命の重さと、其れを自らの為に奪う罪を自覚し背負う覚悟を決めた男の顔は16歳でありながら熟達した者のそれに劣らない。

「アイツは、いざれとんでもない大者になるよ」

そう言う、ミアは剛士の歩む先に期待と、一つの願いを込めた。

どうか…あの男が女神の琴線に触れないように、と。

「ふん…っー」

ミアさんから石材屋の場所を聞き、探し求めていた物を購入しようとしたのだが…俺の要望に叶うものは今は無く、取り寄せる必要があるとの事。

頭金を渡し、届く日程を確認し終えた俺は再びダンジョンに潜り、拳を振るっていた。

一体倒し、次の一体に向かう度に修正点を見直し、最小限の動きを以て最大限の一撃へと近づけていく。

その最中、背後から感じた殺気に身体を捻ると、横を灰色の影が通り過ぎた。

視線を向けた先に居たのは、一体の異形。

姿形は人に近い見た目をしているが…その体を灰色の体毛が包み、更にはその頭部には本来ならば有り得ない、犬の頭が乗っている。

「コボルト、か…」

それも1体ではない。

壁が割れる音が聞こえるや、同じ姿が何体も姿を現し、気づけば10体のコボルトに囲まれる。

ゴブリンやコボルトは1体だけならば脅威足り得ず、駆け出しでも倒せる相手だと言う。

そう、あくまで1体ならば。

「少し、骨が折れるな…」

小さく呟き拳を握り締める。

一対一ならば、真っ向から立ち会えば済むが乱戦となればそうもいかない。

常に周囲の挙動に目を配る分体力だけでなく神経も消耗するため、僅かな気の緩みが命取りになり兼ねないのだ。

「だが…後には退かん」

一体のコボルトがその俊敏さを利用して肉薄、突き出してくる爪を躲し…手首を掴む

と勢いを利用し投げる。

「ガア……ッ!？」

コボルトは地面に背中を叩きつけられ息を洩らすが、回復する暇は与えない。

渾身の力を込めた拳を顔面に叩き込み、一撃でコボルトを絶命させる。

本来なら絶命させるほどの威力を出すなど不可能だが……恩恵を授かり、この1週間でステイタスの向上があつた為か的確に急所を潰せば倒す事が可能だ。

「さて……」

残り、9体。

俺がその男と出会つた……いや、見かけたのは単なる偶然だつた。

ダンジョンへと降る階段ですれ違つただけ……ただ、それだけだ。

黒い外套に帽子と言う、冒険者らしくない風貌の男と目が合う。

俺を知る者ならば、目が合うなり逸らすか、あるいはたじろぐか……畏れる者が多い。

だが…その男は、俺を知らないのか何処までも真つ直ぐな瞳で俺を見ていた。それも、僅か数瞬。

互いに視線を外すと、俺達は別々の行き先へと足を進める。

「おい、今の…」

「ああ、死に急ぎだ」

近くを通っていた冒険者が、先程の男を見て小さく呟く。

死に急ぎ…先程の姿を見て言い得て妙だ。

いくら金のない駆け出しでも最低限身を守る装備を整える。

だが、男には身に纏う衣服以外には武器や防具の類が一切見当たらない。

取るに足らない、そう感じた筈だった。

だが、その男の目が頭の隅に引つ掛かり独自に調べ、幾つかの事が分かった。

男の名は、トドロキ・剛士。

ロキ・ファミリアに入団したばかりの駆け出しの冒険者。

そして…全ての冒険者を超えると吼えた男。

その男の戦いを、俺は物陰から見ている。

数体のコボルトに囲まれ、数的に不利にも関わらず表情は至って冷静。

対峙している相手以外にも周囲への警戒は決して怠らず、最小限の動きで攻撃をいなし、的確に急所へとカウンターを叩き込む。

その動きは駆け出しにしては熟達している事からも、単なる腕自慢ではなく武を齧った事があるのだろう。

及第点…ではあるが、その程度。

そう思った矢先だった。

「…これは」

乱戦ともなれば、体力と神経の消耗から動きが悪くなるのが常だ。

だが…奴は。

一体倒す度に動きの中にあつた粗さが無くなり、放つ拳はより鋭さを増している。

より洗練されていく動きは、まさに舞。

猛々しくも流麗なその舞を見ている内、気づけば最後のコボルトも倒れ、残ったのは

奴の足元に散らばる魔石のみとなった。

「…そろそろ出てきたらどうだ？」

奴が此方へと視線を移す。

気付かれた、だと？

(馬鹿な…気配は確実に…)

「それだけ肌を刺すような気迫を出しときながら、隠れているつもりか…？」

その言葉に、俺は奴の戦いを見ている内…無意識に拳を握り締めていた事に気付かされた。

「…駆け出しの冒険者に此処まで滾るとはな」

「お前…確か、あの時の」

物陰から姿を現わすと、奴は俺を見て思い出したような表情を浮かべた。

「覚えていたか…トドロキ・剛士」

「…アンタからは、フィン達以上の…強者の気迫を感じたからな」

そう言うのと、奴は魔石に向かうようしやがみこむと手を合わせる。

「…何故武器を持たない？」

「どれだけ業物でも、担い手の才が無ければ鈍と変わらないだろ…師には、それにすら至

らぬ木の棒と言われたがな。それに」

無防備な背中に言葉を投げかけると、奴は言葉を返しながら魔石を拾い集めていく。「武器を使えばモンスターを倒しやすいし、防具を纏えば攻撃を防げる…それは確かだ。だが…それは、命を奪う重さを鈍らせる」

そう言っている内に魔石を全て集め終えた奴は踵を返し、俺の横を通り過ぎ…立ち止まる。

「たとえ、馬鹿だと嘲笑われようが…そう進むと決めた道だ」

「…一つ聞かせろ」

確かに、今の奴を死に急いでいる馬鹿だと揶揄する者は多い。

故に、この男がそうまでして進む先が気になった。

「この街に居る冒険者全てを超えると吼えたのだ…その先に欲する物は何だ？金か？それとも名声か？」

「そんなものに興味はない。俺が目指すのはただ一つ…漢の中の漢、それだけだ」  
そう言つて、トドロキ・剛士は地上へと戻つて行つた。

「ただいま戻りました」

「そう…あら？」

ファミリアの拠点に戻り、主神であるフレイヤ様に報告すると彼女は俺の顔を見て少し驚いたような…何かに気づいたような表情を浮かべた。

「どうかなさいましたか？」

「いえ、貴方が久しぶりに笑っているのを見たから…余程、いい事があつたのね」

フレイヤ様にそう言われ、顔に手をやると俺の顔…口元は、たしかに吊り上がり笑みを浮かべていた。

「…ダンジョンで、駆け出しの冒険者に会いました」

「そう…その子は、貴方の目に適ったみたいね」

「ええ…そう遠くない先、好敵手<sup>と</sup>として立ちはだかるでしょう」

## 休日

「休日？」

ロキ・ファミリアに入団をして早くも2週間が経とうとしたある日、フィンに呼ばれた俺にこの言葉を言い渡された。

「ああ。この2週間、君…休んでないだろ？」

「？睡眠時間は取れてるし、身体に不調はないが…」

フィンの言葉にこれまでの事を思い出す。

食事と睡眠はしっかりと取れているし、身体は健康そのもので問題はない。

だが、その言葉にフィンは苦笑し同席していたリヴェリアとガレスは頭を抱えている。

「タケシ…君がオラリオに来て一月半ずっと見てきたが、準備期間から今までまともに、一日休んだのを見たことがない」

表情を切り替えて、改めて俺を見るフィンの言葉にこれまでの行動を思い返してみる。

最初の一ヶ月…リヴェリアやフィンから教わっている時以外は延々と文字の読み書

きや顔見知りだったティオナ達と会話、あとトレーニング

今…ダンジョン以外は食事と睡眠、入浴…あと、トレーニング。

「…日本にいた時と変わらん」

『はあ…』

何か問題でもあったのか、3人が揃って溜息を吐き残念なものを見るような目で見てくる。

「…とにかく、今日は一日休むように。ダンジョンは勿論、トレーニングも禁止だ」  
「む…」

「とは言え、どうしたものか…」

フィンから急な休みを言い渡された俺は、仕方なくオラリオの街中を歩きながら何を  
するか考え流。

身体を休め、筋肉の回復を図るという意味で言えば、今日の休みは願ったのだが……こ  
れまで身体を動かさない日が無かった事もあり、何をしようか悩んでいた。

「お、タケシじゃねえか」

「む」

露店の並ぶ街道を歩いていると、不意に言葉を掛けられる。

声の主を探し視線を動かしてみれば、其処に居たのは見知った顔。

アラン：オラリオの一角で八百屋を営む男で、デメテル・ファミリアと契約し野菜を  
卸して貰っているらしい。

「アランさんか……腰の具合はどうだ？」

「おう、もうこの通りよ！今日はダンジョンか？」

アランさんは屈強な身体つきをしているが、俺の親父と変わらない。

年には勝てないのか、数日前に腰を痛めたばかりだ。

だと言うのに、今日の前に立つ彼は完全に治った様子……治療院で診て貰ったのだろ  
う。

「いや、フィンからの命令でな……今日は休みだ」

「カカカツ、お前さんでも【勇者】にや勝てねえか！」

質問に答えると腹を抱えて笑うアランさんの姿に顔を顰める。

怒っている訳ではない：改めて、超えると誓った好敵手の背中がまだ遠いと改めて認識させられただけだ。

「んな顔するなよ、お前さんはまだ駆け出しだが：器のデカさじゃ負けてねえ」

「ああ…っ」

俺の顔を見たアランさんは、肩を竦めると後ろに積んだ荷物から林檎を取り出して俺に放ってきた。

「これは…？」

「デメテル・ファミリアから届いたばかりの上物だ、一つやるよ」

「そうか…いくらだ？」

「貰つとくれ、ウチの亭主が腰痛めた時に手伝ってくれた御礼だよ」

林檎の代金を払おうとすると、横からまた声を掛けられる。

其処に居たのは恰幅の良い女性：アランさんの女房であるレイラさんだった。

「…そう言う事なら、有難く戴きます」

別に礼を求めて行つた事では無い。

困っていたから手伝つた…ただ、それだけの事だったのだが、2人からそう言われる

と断るにも断れないため戴く事にし、また困った事があつたら手助けする事を約束して店の前を後にした。

「おう、タケシー！こないだは助かつたぜ、コイツは礼だ！」

「あら、タケシじゃないか。良かったら持つてお行き…つて、何払おうとしてんだい！お代は良いから！」

アランさんの店を後にして、街道を歩けば色んな人…お節介から手助けした人々に色々と手渡され、気付けば手ぶらで歩いていたのが荷物で一杯になってしまっていた。

（参ったな…皆、人が良いから断るに断れず…）

小さく溜息を吐く。

皆から貰ったのは、彼らが生きるうえで大事な売り物…それも、上物で安くても普通の品より少し高い値がつくものばかり。

普通に店頭で買おうものなら総額で破産しても可笑しくない。

厚意で戴いた物だから無碍にする訳にもいかなかったため、どう処理しようか考えていた時……視界の隅

普段ならば見逃しているだろう路地裏へと視線が向かった。

其処に居たのは、1人の女性と数人の男達。

恐らく……いや、十中八九言い寄っているのだろう。

明らかに怯え、嫌がっているような表情を見せる女性の姿が目に入ってしまった。

「……ふむ」

アンナ・クレーズはオラリオで花屋を営む両親と暮らす、至って普通の街娘だ。

だが、その容貌はオラリオでも上位と言われており、滞在している男神から求婚ほどの美貌と噂されている。

その美貌から、神だけでなく街の男達も放っておくことはなく……アンナは今、冒険者と思われる数人の男達に言い寄られていた。

「なあ、良いだろ？」

「いえ、ですから……」

「家の手伝いなんて何時でも出来るだろ。それより……俺たちと遊ぼうぜ？」

ガラの悪い男達数人に囲まれ、戸惑いと恐怖の混在する中、アンナを助ける者は居ない……筈だった。

「何をしてんだ？」

大通りに繋がる出口から、低い声が聞こえた。

その場に居た全員が視線を動かした先に立っているのは、1人の男。

見たこともない黒い衣服に木で作られた履き物、両手には2つの紙袋を抱えている。

「なんだ、テメエは？」

「質問には質問で返すなと教わらなかつたのか……？何をしているか、と聞いてるんだが？」

男達の1人が凄んで睨みつけるが、紙袋を抱えた男：剛士は動じた様子を見せず、淡々と質問を繰り返す。

その異様な姿、毅然とした態度に楽しみを中断させられた男達は苛立ちを見せる。

「さつきから何ゴチャゴチャと言つてやがる！」

「なあ、其処のアンタ：コイツらは、アンタの知り合いか？」

苛立ち声を荒げる男を余所に、剛士は視線を

アンナへと移す。

急に自身へと話を振られた事に驚くも、咄嗟にアンナは首を横に振った。

其れを見て、小さく数回頷くと：剛士は口を開いた。

「成る程：つまり、アンタらは見ず知らずの女の子を数人がかりで囲つてナンパしていた訳か」

剛士の口から発された声は、決して大きなものではない。

にも関わらず、その声は良く通り：通りを行き交うなかで耳にした人々が1人、また1人と視線を路地裏へと向けていく。

「っつ、クソ……！」

次第に増えていく観衆に男達は忌々しげに剛士を睨む。

この状況で此方が手を出せば、騒ぎを聞きつけたガネーシャ・ファミリアの団員達が駆け付けるだろう事は容易に想像出来る。

事を大きくすると自分達が更に不利になる事を察した男達は、逃げるようにその後にして、残ったのは剛士とアンナだけとなった。

「…大丈夫か？」

「は、はい…助けていただき、ありがとうございます」

初めは身構えたものの、剛士が自分を見る目に下心がない事を理解したのか、アンナは安堵したような表情を浮かべて感謝の言葉を口にする。

「気にするな、単なるお節介つて奴だ」

「あ、あの！何かお礼を…」

その言葉に小さく会釈で返し、剛士はその場を後にしようとするが、アンナは慌てて呼び止めようとした。

「…別に見返りを求めた訳じゃねえ。困ってる奴を助けんのは、人としての道理だ」

しかし、剛士としては困っていたから手を差し伸べたに過ぎず、肩越しにそう口にするアンナに背中を向けてホームへと歩いて行った。

「やあ、タケシ。休日はどうだった？」

休日が終わって次の日、一人で処理するには多過ぎる貰い物をいつもの面子で食べていると、後ろからフィンが声を掛けてきた。

「休んだ気がしない1日だったな…だが、悪い気はしなかった」

「そうか、それは良かった」

アランさんから貰った林檎を齧りながら答える俺に、フィンは小さく笑いながら頷く。

そして、ふと思いついたように俺を見て切り出してきた。

「そういえば、昨日女性を助けなかったかい？」

「…覚えてないな」

## 死闘

それは、地下迷宮の中でも入り組んだ、誰もが気づかない場所でひっそりと生まれた。ダンジョンから生み出されたモンスターは、神々とその眷族である冒険者に対する敵意、憎しみを持つと言われている。

だが。

『それ』は、ヒクヒクと鼻を動かしまるで何かを嗅ぎ分ける仕草を見せると、ゆっくりと動き出した。

迷宮都市オラリオ。

世界で唯一の地下迷宮を持つ街は今日も賑わい、街道を挟むように並ぶ露店では、客を呼ぶ声が飛び交っている。

「タケシさん……！」

下駄を鳴らしダンジョンへ向かっていると、背後から呼びかける声が聞こえた。

つい最近、よく聞く声に振り返ると其処に居たのは以前ナンパから助けた女性。

「……アンナか」

件の女性……アンナはあの後、街の人から俺の事を聞き、わざわざファミリアまで礼を言いに来たのだ。

そこで終わればまだ良かったのだが……それから、街で会う事があればダンジョンでの事や日頃の話をするようになり……いつの頃からか、拠点に顔を出しては差し入れとして弁当を作ってくるようになっていた。

「今日も、ダンジョンですか……？」

「ああ……お前さんは、店の手伝いか」

行く方向が途中まで同じなのか、二人並んで街を歩く中、ちらりとアンナの横顔を見

る。

「分かってるだろうが…」

「移動するときは、人通りの多い所を…ですよね」

何度も言われているからか、微かに頬を膨らませるアンナを横目に、バベルへと二人歩みを進める。

「ああ…と、ここまでだな」

気がつけば、バベルの入り口前まで来ていた俺はアンナへ背を向けてダンジョンへと向かう。

「タケシさん！」

そんな時、背後からアンナの呼ぶ声が聞こえた。

「…無事に、帰ってきてくださいね」

振り返った先に居る彼女は、何処か不安そうな顔で俺を見てそう言った。

タケシがオラリオに来て今日で3ヶ月、ファミリアに入って2ヶ月が経つ。

今日も今日とて、アイツは一人でダンジョンに行つて…その間、ウチは主神として目を通さなアカン書類を片付ける傍ら、異世界の事について調べ物を続ける。

せやけど…。

「あ…：…全く解らへん」

書齋から他の神に気づかれんような場所、くまなく探しては見たけど異世界についての情報なんてもん、これっぽっちも見つからんかった。

それだけでも頭痛の種つちゆうのに…。

「ロキ、ちよつと良いかい？」

机に置かれた紙を手を取つたのと同時に、フィンが部屋へ入ってきた。

「お、どないしたんや？」

「タケシを知らないか？」

フィンの口から出た頭痛の種の名前に思わず苦笑する。

タケシがファミリアに来てから、フィンもガレスも…意外にも、ベートも変わった。指摘すれば皆口を揃えて否定するやろうけど、男衆は皆タケシに負けんよう今迄以上に己を研ぎ澄ませている。

「タケシやったら、ダンジョンに行ったで」

その事を嬉しく思いながらフィンの問いに答えると、何やら深刻そうな顔をして自身の手を見始めた。

「…何かあるんか？」

「…さつきまでは何とも無かったんだけどね」

「タケシがダンジョンに行った時からか、親指が疼きだしたんだ」

フィンの親指が疼く…その意味する所を知らんもんは、ファミリアには居らん。

「彼なら大丈夫と思いたいが…何人か手の空いてる者をダンジョンに向かわせるよ」

足早にフィンが部屋から出て行くのを見送るや、ウチは手元にある紙…タケシのステ

イタスが書かれた紙を見る。

そこに記された数値は：冒険者になって僅か2ヶ月で、レベル1では頭打ちになっていた。

「…おかしい」

ダンジョンへ降り、辺りを見回して小さく呟く。

普段ならモンスターが出現しても不思議ではないポイントまで来たが、一向に壁から現れる気配がない。

まるで、何かに怯えているような…そんな違和感を抱えていた矢先の事。

「……っ！」

突如、背中に氷を入れられ：同時に心臓を直に掴まれたような、ゾワリとした感覚が襲ってきた。

今起きている出来事と、何か関係が：そう考えていたその時。

ゆっくりと、『それ』は現れた。

ズン、と地面を微かに揺らすほどの力強い一歩とともに現れたそれは、何かを探すように鼻を鳴らし辺りを見回す。

そして：俺の姿を視界に入れた瞬間、ニイ：と口元を歪め嗤った。

剛士がダンジョンへと潜って数刻の時間が過ぎた頃、バベルに数人の冒険者で構成されたパーティがたどり着いた。

彼らは皆、フィンによって休みであった中招集された面々である。

「それで…何処にいるんすかね、タケシは」

そんなパーティーの中でも一際異彩を放つ平凡な見た目の青年…ラウル・アーノルドが辺りを見回しながら呟く。

「分かるわけないでしょ。ダンジョンから出てきてないのは、確かだけど…」

ラウルの言葉に返事を返しながら、猫の耳と尾を持った猫人の女性…アナキティ・オータムは同様に辺りを見回し特徴的な剛士の姿を探す。

「おい、聞いたか？さっきの話」

「ああ…上層でミノタウロスを見たってんだろ？本当かよ」

偶々横を通り過ぎた冒険者の話す言葉が、パーティーのメンバー達の耳に届く。

一瞬、冗談だという内容だった。

中層に出現するミノタウロスが、上層に現れる事など普段ならば到底有り得ない。

だが

冒険者の言葉を聞くや、表情を険しいものに変えてダンジョンへと駆けていくフィン

の姿を見て、パーティの面々はそれが冗談だとは思う事が出来なかった。

ミノタウロス。

日本においてはRPGを始めとしたゲームで広く知られている牛頭人身の怪物。

その伝承は辿れば古くギリシャ神話に語られる「テセウスのミノタウロス退治」や「リアドネの糸」と言われれば知らない者も少なくない。

そんな、古代ギリシャで語られた怪物と同じ名を冠するモンスターが俺の目の前に現れた。

退くことを許す訳がないと悟り、応戦した。

だが…彼我の差は、あまりにも大きかった。

これまで培ってきた力を振り絞った全力の拳や蹴りも、雄牛の身体を包む鎧のような筋肉に悉く阻まれ、一切のダメージを与える事が出来ず。

雄牛の一撃は、掠っただけでも皮膚を切り裂き、真面に受ければ良くて骨折…悪くて内臓の破裂を始めとした致命傷。

理不尽、出鱈目という言葉が喉まで込み上げる。

長年の積み重ねが容易く崩され、瓦礫と化す。

数字で見ればたった1しか変わらないレベルの差が、ここまでの壁となる事を今頃になつて痛感した。

「つ…が…」

どれだけの時間が過ぎただろう。

苛烈でありながら、じわじわと翺るような攻撃に晒され、繰り出す攻撃の悉くを否定され

気付けば、俺は身体中傷だらけの状態で頭を掴まれていた。

ゆっくりと、真綿で首を絞めるように雄牛の手に力が込められ、ミシミシと頭の奥で軋む音が聞こえる。

(此処で…俺は、死ぬのか?)

薄れゆく意識の中、朧げに誰かの姿が脳裏を過る。

この世界に来て出会い、関わってきた人々  
高みを目指し、鎬を削ってきた好敵手

帰還を願う、不安げな表情を浮かべた少女  
そして…越えると誓った背中

(まだ…だ)

薄れていた意識がゆっくりと浮上し、身体にまだ力が入る事を実感すると、ミノタウロスの手を掴み頭から引き剥がす。

「…死ねん」

骨が軋み、筋肉が悲鳴をあげ、折れた肋骨が内臓を傷つけたのか息をする度に激痛と息苦しさが身体を襲う。

だが、知った事か。

「俺には…帰りを待つ人達や、越えなきやいけない人達がいる」

震える膝に拳を落とし、無理矢理震えを抑え、相対する雄牛を睨みつける。

「越えたい背中が、まだ先にある……」

「故に……越えさせてもらうぞ」

冒険者達の話に聞き耳をたて、そこから得た情報を元にダンジョンを駆け。

剛士が襲われているであろう場所にたどり着いたフィン達は、目の前の光景に瞠目していた。

「アアアアアア！」

まず、ミノタウロスの体軀が想像より大きい。

中層で見るソレの体より2回りほど大きな事からも、剛士と対峙しているミノタウロスは強化種や変異種の類。

レベル1の冒険者が遭遇して、生きている事はまず不可能…その筈だった。

「嘘…」

誰かが、思わず小さく呟く。

だが、それは仕方のない事で有り、この場に居る全員の気持ちであった。

ミノタウロスの前に立つ剛士は明らかに満身創痍だ。

裂傷や打撲だけではなく、身体の数箇所が赤黒く腫れ上がっている事から骨折している事は明らか。

それにも関わらず、剛士はミノタウロスと互角の殴り合いを繰り返していた。

眼を血走らせ、血反吐を吐き散らし

足を纏れさせながらも声にならぬ咆哮をあげ、砕けた拳でミノタウロスの顔面に重たい一撃を叩き込む。

その姿は、普段の剛士とは真逆の在り方。

目の前の敵を打ち倒す事に集中し、全てを注ぐ獣がそこに居た。

「っ……」

互いの拳が顔面に突き刺さる感触とともに、意識が飛び頭がかち上げられる。

「ま、だ……まだあ……」

途切れかけた意識を意地で繋ぎ止め、どちらからともなく頭をかち合わせ再び殴り合いを続けていく。

身体を動かす度に碎けた拳に激痛が走り、鉄臭い独特の匂いがこみ上げ、意識を手放せと脳が警鐘を鳴らす。

しかし、奥底から湧き上がる思いが其れを否定し、拒絶する。

(越えたい……)

ミノタウロスの一撃を受け、お返しとばかりに拳を振るう度にその思いは熱となり、心臓が大きく、強く鼓動する。

(目の前の壁を…越えたい)

体勢が崩れたのを好機と見たのか、走ってきたミノタウロスを視界に捉え、勢いそのままに無防備な腹に蹴りを入れるが踏ん張りが効かず、同時に地面に倒れ込む。

(身体中が痛い…眠い…)

体力も底を尽きたのか、倒れた途端に疲労感と眠気が押し寄せてくる。

(…それが、どうした…)

再び意識を繋ぎ止め、体に力を込める。

立ち上がれ。

拳を握れ。

前を見据えろ。

目の前にある壁は、まだ聳えているぞ。

力不足？限界？それがどうした。

ここが一番の踏ん張りどころなんだ。

此処が限界だと言うならば

「アアアアアアアアアアア！」

限界など、越えてしまえ

雄牛にとって、男は鬪るだけの弱者に過ぎなかった。

彼我の差に恐れを抱かず立ち向かう姿勢は称賛こそすれ、自身の身に宿る飢えを満たす事は叶わない。

軽く腕を振るうだけで吹き飛び、その身体に傷を増やし、それでも立ち上がり拳を振るう。

それでも、飢えは治るどころか増すばかりだった。

次第に力も弱まり、拳の重さも減ってくる。

雄牛は落胆した。

これ以上、相手の無様な姿を見る前に引導を渡す方が慈悲があると感じ、男の頭を掴む手に力を込める。

手の中で骨が軋む音が聞こえるなか、男の纏う空気が変わった。

自身を斃し、生き残るといふ覚悟。

死に体でありながらも内に劫火を灯した人間の姿に雄牛は歓喜する。

生まれ落ちた時から感じていた飢えの正体……それは、闘争。弱い者を屠るのは単なる虐殺。

生に渴望を抱き、その為に死力を尽くし抗う者。

何度膝を着こうとも一步も退かず、立ち上がる強者との闘い。

ダンジョンにより生み出されたモンスターでありながら、雄牛は憎しみよりも己の内に宿る強者としての飢えを優先し、何より願った。

自らに臆する事なく、死力を以って打倒せんと立ち向かう強<sup>強</sup>者を。

雄牛が拳を振るう度、人間は負けじと砕けた拳を振るう。

皮膚を裂かれ、肉を切られ、骨を砕かれ。

血反吐を吐き散らしながらも立ち上がる。

その姿を見るたび、雄牛の攻撃は苛烈さを増した。

お前の攻撃はその程度か？

お前の底はその程度か？

もう終わりか？

言葉は通じずとも、一撃一撃にもつと自分を愉しませろと思いを乗せる。

そして、それに答える人間の姿に雄牛の血は騒いだ。

瀕死でありながらも生を諦めず足掻く人間の拳は荒々しくも鋭さと重みを増してい

き

いつしか、痛痒も感じなかった一撃からは確かな痛みと自身に匹敵する重さになって  
いた。

幾度かの応酬の末、2人同時に地面に倒れ込む。

相対する人間はとうに限界を迎えており、自身もまた、軽傷とは言えない傷を負った。

身体を倦怠感と疲労感が襲う。

しかし、それ以上に内を焦がす熱が目を閉じる事を許さない。

なにより、此処で目を閉じようとする自身が許せない。

緩慢な動きで身体を起こし、人間へと視線を移す。

どうやら、向こうも同時に起きたようだが、その身に燃やす命は風前の灯火。軽く触れれば、そのまま倒れ二度と起き上がらないだろう。

そう、雄牛は捉えていた。  
だが。

「アアアアアアアアアアアア！」

人間が咆哮をあげた次の瞬間、消えかけていた灯火が、一際強く、激しく燃え上がった。

その場に居た者達は、自身の眼に映る光景が信じられなかった。

先程まで死に体となりながらも、ミノタウロスを相手に互角の殴り合いを繰り広げていただけでも、轟剛士の戦いは十分に評価に値する行為だ。

だが、しかし。

血反吐を吐き散らし、もがくように立ち上がるや一際雄々しく咆哮をあげた……その瞬間。

剛士の胸部に、紅い拳型の痣が浮かび上がるや、其処から焔が迸ったのだ。

何が起きたのか、剛士の救援に來た面々は誰も解らない。

それだけでは無い。

先程までの荒々しい拳とは違い、自分達の知る理性を持った拳を剛士はミノタウロスへと叩き込む。

だが、その全てが自分達の知るものとはまるで違った。

ミノタウロスへと叩き込む拳打は残像を残し、まるで拳が分裂したかのように速く。

ミノタウロスが放つ必殺の一撃を紙一重で躲し、返すように放つ蹴りの一撃一撃は時には鞭の、またある時は槍のように鋭い。

「…限界を超えた、か」

先程よりも静かながら、より激しさを増すという矛盾を孕んだ闘いを前にフィンが小さく呟く。

だが、その眼は険しく危うい物を見るような眼差しだった。

それもその筈。

ただでさえ瀕死に近い重傷を負いながらも、自身より遥かに格上であるミノタウロス

と互角の殴り合いを行ったうえで更に限界を超えた肉体の行使など命を削る行いであり、止めなければならぬ。

それが、ファミリアの団長である自分の責務であるにも関わらず

1人の男として、止められない事が悔やまれた。

「嘖ッー」

地面を砕き、揺らす程の踏み込みと同時に放った振り上げ<sup>アッ</sup>が雄牛の腹部に突き刺さり、その身体をくの字に曲げる。

身体の奥底で暴れていた熱が嘖き出してからというもの、周りの動きが何処か緩やかに感じられ、同時に妙に冴える頭が思考するより先に体に命令を下し、最適化された一撃を繰り出し続ける。

自身の身体が別の誰かに操られているような違和感を感じていたが、それも次の一撃

で終わると悟るのは容易かった。

片膝をつく雄牛も、それを理解しているのだろう。

渾身の一撃を放つべく姿勢を低くし、天に向けて聳えていた鋭い角を此方へと向けている。

「……来い」

対して、此方の構えは。

地面を力強く踏み締め、両腕を広げ。

真っ向から受け止めるのみだ。

どれだけの時間が流れたか解らない。

誰かの頬を伝う汗の一滴が地面に落ちたのと同時に、雄牛が動いた。

溜めに溜めた力を一気に解放し、僅か数秒で最高速度に加速し、雄牛は疾走する。

総ては、自身の血を滾らせ心を躍らせるほどの闘争を行った男へ、己の残った武器で  
ある角を突き立てる……ただ、その為に。

9秒足らずで両者は激突した。

間合いに入った瞬間、男は雄牛の角を掴むが、その力強さに足が宙に浮き上がる。

しかし、体重をかける事で再び地面を踏み締め、雄牛の進行を止めんと残った力を振り絞り踏ん張ってみせた。

前に進む力と踏み止まろうとする力。

両者の力が拮抗するが、雄牛が一步踏み出す度、地面に二本の轍が刻まれる。

どちらとなく、声にならぬ雄叫びとともに男は次第に雄牛の力に押されていき、  
 10  
 程進んだ所……不意に、雄牛が足を止めた。

次いで、闘いを見届けていた者達が聞いたのは、硬い塊が地面に落ちる音。

雄牛の足元には、頭部から生え、今まさに男へ突き立てんとしていた角が転がっていた。

「…止めて、みせたぞ」

息も絶え絶えに男は呟く。

重傷を負い、その状態で更に己の限界を超えて身体を酷使した男には、残っている力など雀の涙程度しかない。

だが、その眼に宿る闘志と胸部に灯る焰は消える事はなく、一際強く燃え盛っている。

「…」

雄牛は何も言葉を発さない。

地面に転がる自身の角と、目の前に立つ血だらけのまま此方を見る男へと視線を移動させ…口元を歪めた。

一見すれば、怒り歯を食いしばっているように見える。

だが、男には雄牛が懐く思いが不思議と理解出来た。

雄牛の目を見て小さく頷き、男は拳を振り上げ、その姿を視界に納め、雄牛は静かに目蓋を閉じる。

静寂に包まれた地下迷宮に雷鳴の如き轟音が鳴り響く。

それを最期に雄牛の身体は塵へ変わり

ゴト、と音をたて魔石が地面に落ちた。

## 神会

ロキ・ファミリアに所属するレベル1の冒険者がミノタウロスを打倒した、という話は瞬く間にオラリオの隅々まで知れ渡った。

その反応は様々で、彼を知らぬ者は眉唾だろうと鼻で笑い

噂を聞いた事がある者は急速な偉業の達成が面白くない、と苦虫を噛み潰し

そして、彼を知る者達は両手を挙げ我事のように喜んだ。

だが、それも束の間。

件の冒険者が瀕死の重傷を負った事を知るや、彼を知り、関わった者達がロキ・ファミリアの本拠へと押し寄せたのだ。

親に連れられた子どもから、杖をつく老人まで、性別や年齢、果てには種族もバラバラなオラリオに住む人々が、毎日絶えることなく各々見舞いの品を手に本拠を訪れ、彼の快復を祈り後にする。

そんな光景が3日程続く中、ロキ・ファミリア本拠にある一室では件の冒険者…轟剛士が眠っていた。

微かに開いた窓から穏やかな風が吹き込む音と、剛士の呼吸する音の中……傍らには、ファミリアに足繁く通うようになった花屋の娘であるアンナが、椅子に座って剛士の様子を見ていた。

ダンジョンから帰還した時の剛士の状態は決して良いものとは言えなかった。

両手は赤黒く腫れ上がり、身体中には裂傷や打撲痕が複数刻まれ無傷な箇所を探す方が困難な程。

更に言えば、臓器も損傷しており普通の治療を行うとなれば一刻を争う状態だった。

だが、そこはオラリオでも上位のファミリア、フィンを筆頭に救援に来たパーティに地上へ運ばれるや迅速な治療が施された。

地上ではロキから話を聞いていたリヴェリアが最前に行っているディアンケヒト・ファミリアの団員を連れて待機しており、即座に治療院へ搬送。

傷も癒え、一命を取り留めはしたものの、剛士は眠り続けていた。

「タケシさん……貴方に助けられた皆、タケシさんが目を覚ますのを待ってますよ」

風に揺れる剛士の髪を梳くように指先で撫でながら言葉を紡ぐ。

「それだけじゃありません…フィンさんも、リヴェリアさんも、ロキ様も…ファミリアの方々も、タケシさんを待つてます」

穏やかな声音で語るも、アンナの声は微かに震えている。

このまま、目を覚さないのではないか…そんな不安と恐れが胸を締め付けた。

「だから…っ」

溢れそうになる涙を堪えながら言葉を紡ぐアンナだったが、その言葉が途切れる。

「…っ」

布団から出た右手…砕けた骨も、裂けた皮膚も完全に癒えたその指先が微かに動いたのだ。

そして、閉じられていた目蓋がゆっくりと開かれ

「…アンナ、か…」

地下迷宮で繰り返された死闘から3日経ち…轟剛士は、漸く眠りから覚めた。

オラリオの中心に聳え立つ塔：バベル。

地下にはダンジョンが広がっているが、その上

塔には、冒険者達の生命線とも言える武器や防具を製作している「ヘファイストス・ファミリア」の店の他に上層には神が住んでいると言われている。

そのバベルにある大広間に、オラリオに降り立った神々は集まっていた。

神会：神々によつて開かれる会合であり、其処では昇格を果たした冒険者の二つ名を決める「命名会」も行われる。

そんな神会の行われる会場に、ロキは居た。

「ロキ」

広間に設けられた席に座り、小さく欠伸を噛み殺すロキの下へ一人の神物がやって来

る。

赤い髪に眼帯を着けた女神：ヘファイストス

オラリオに存在する鍛冶系ファミリアの中でも1、2を争うファミリアの主神であり、剛士の世界において鍛冶の神として知られている存在であった。

「おう、ファイたん。久しぶりやな」

「ええ、貴女も元気そうね」

互いに笑みを浮かべ、ここ最近会えなかった友神との再会を喜ぶ2人。

「貴女のところの子、目を覚ましたそうね。私のファミリアで世話になった子が話していたわ」

「漸くや…まったく、毎日見舞いに来る子がぎょうさん居って大変やったわ」

ヘファイストスの言葉に呆れたような愚痴をこぼすも、ロキの顔には安堵の表情が浮かぶ。

それから、彼女が如何に件の団員を目にかけているかを読み取り、変わらぬ心の深さにヘファイストスは笑みを浮かべ口を開く。

「そう…だったら、よりそんな子に合う【二つ名】を決めなきゃね」

「づ…：そうやな」

へファイストスの言葉に言葉を濁すロキ。

神会の中でも命名式は神々が特に悪ふざけをする。

要するに、痛々しい二つ名を与えられる恐れがあると言う事だ。

「二つ、名？」

目を覚ました俺は、意識を失っている間に起きていた事をアンナに呼ばれたフィンやリヴェリアから聞いている。

どうやら…：俺の記憶ではつい先程の出来事なのだが、ミノタウロスとの戦いから数日が経っていて、その時にランクアップを果たしレベルが上がっているらしい。

「ああ。ランクアップをした冒険者は、ファミリアの主人達の集まり【神会】で二つ名を付けられる…僕の【勇者】<sup>フレスタ</sup>やアイズの【劍姫】のようにね」

フィンの言葉を聞くに、二つ名というのは所謂通り名。

ソイツの代名詞とも言われるものらしい。

(通り名…【狛枝の狂犬】みたいなものか)

通り名、と言えば日本に居た頃に出会った奴らの中にも通り名みたいなのを持つたのが何人か居た事を思い出した。

そういつたのを持つた奴らは、確かに腕っ節が強い奴や何かしらの逸話を持つた奴が多かったが…。

「…あまり興味は無さそうだな」

他人事のように話を聞いていた俺に気づいたりヴェリアが、呆れたような目で此方を見てくる。

「どのような名で呼ばれようが、目指す先は変わらない…ただ、自分の道を進むだけだ」

ファミアリアに属する子がランクアップを果たした日、神々はその祝福として二つ名を与える。

しかし、娯楽に飢えた神々にとつては、それすらも娯楽の一つ。

ましてや、その感性は現代日本の人間に近い所が多い：その意味する所は

「そんじや、ヘリオスのとこの子の二つ名は【バーニングファイヤーソード爆熱火炎剣で！」

「ふざけるなあああー！」

悪ノリした挙句、とんでもない痛々しい名前をつけられてしまう事も、少なくない。

神会の行われていた会場は今や笑い声、悲鳴、怒鳴り声が飛び交う混沌と化し、其れを眺めていたヘファイストスは呆れたように溜息を吐き、ロキは腹を抱えて大笑いしている。

「笑い事じゃないでしょ？タケシ、だったかしら。その子にもあんな名前を名乗らせる

の?」

「タケシのヤツやから多分、二つ名に頓着せえへんやろうけど…ウチは勘弁やな」

ヘファイストスの言葉に数ヶ月ながら剛士と関わり、その在り方を見てきたロキは返すが、もし彼があんな名前…日本でいう中二どころか小学生が思いつくような名前を背負った姿を想像して身震いする。

「さて、次は…? ロキ・ファミリアのトドロキ・剛士、レベルは2。為した偉業は…: 単身、素手でミノタウロスを討伐う?!」

剛士の名と、打ち立てた功績を聞いた神々は騒めいた。

彼を知らぬ神はその報告が偽りではないか、ロキが何かイカサマを行ったのではないかと疑い。

「そうか、彼が…」

「目を覚ましたって、ルノアが言っていたわね…今度、お見舞いに行こうかしら?」  
「いつか大きな事を為すと思っていたが!」

彼を知る神々はその偉業を手放しで祝福し、中には気遣う様子を見せる者も居た。

中でも医神、豊穰の女神、街の治安を担う象神の様子を見た進行を担当する神は目を

見開いた。

ファミリアに入団して僅か数ヶ月の団員が、名を挙げる以前から数人とはいえ神に認められている事。

何より、その神というのが地上に降り立った神々の中でも有数の神格者である事に。

だからこそ、剛士の二つ名決定は難航した。

ふざけた名前を与えようとすれば彼の神々から無言の圧が掛かり、彼に相応しい名を、と考えればいくつもの候補が挙がり決定に至らない。

そうこうしていた時だった。

「飛翔<sup>イカロス</sup>、なんてどうかしら?」

シン、と静まり返った会場内に声が響いた。

神々が視線を移した先に居たのは、1人の女神。

長い銀髪に誰もが惹きつけられる美貌を持つ、その女神の名はフレイヤ…現在、オリオの2大巨塔として名高いファミリアの主神であった。

飛翔：ただ一つ、遙か遠くの求めるものへと進んでいく様はそう例えられても良いだろう。

賛同する神の多いなか、ただ一人：ロキだけが、薄く開かれた目でフレイヤを睨んでいた。

「【飛翔<sup>イカロス</sup>】…か」

神々の集まりから戻ったロキから、決定した二つ名を聞かされた俺は小さく呟いた。

この場には、俺とロキの他にフィンやリヴェリア、ガレスが集まっており、全員の視線が集中する。

「最初はあのフレイヤがどないつもりか気になつとつたけど…その名前、タケシは何か知つとるんか？」

そう尋ねてくるロキの言葉、世界の成り立ちから恐らく…神々の存在は信じられてき

たが、神話などに相違点があるのだろう。

俺は、小さく呟くと簡潔にだが語る事にした。

迷宮に父とともに幽閉され、蠟で固めた翼を以つて其処から脱出した男の話を。

自らを過信し、父の忠告を無視し太陽へと近づきすぎた結果、翼を固めていた蠟が溶け、墜ちたその結末に至るまでを。

「なんやそれ…アイツ、タケシが墜ちるとでも言いたいんか!？」

話を終えた時、部屋の中は静まり返り、ロキは怒りを露わに椅子から立ち上がる。

ロキほどとはいかなくとも、フィン達の表情は僅かながら不満と言いたげだ。

「…落ち着け。この世界にその話が伝わってない事から、その名前は偶然だろう」  
「しかし、お前は良いのか？」

俺の言葉にロキは小さく溜息を吐いて怒気を沈め、リヴェリアが一瞥してくる。

「昼間も言ったが、俺はどのような名を与えられようが自分の信じた道を進む。寧ろ自戒として受け取ろう」

そういうと、俺は此方を見る面々に不敵な笑みを浮かべ口を開いた。

「イカロスは驕り、地に墜ちた…だったら、俺は驕る事なく頂まで飛んでやる」